
とある不幸の第二人生

森々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある不幸の第二人生

【Nコード】

N1110W

【作者名】

森々

【あらすじ】

ある『ついていない』少女が人としての人生を終え、新たな人生を歩み始める。そして、少女が訪れたのは学園都市。少女はそこで……

プロローグ

彼女の人生は『ついていかなかった』その一言に尽きる。

なんてことのない田舎に住み畑仕事に勤しむ日々。同い年の友人達と笑いあい。裕福ではなかったが家族は皆仲が良かった。

しかし、彼女はついていない。

戦争が始まり父と兄は戦争の召集で戦地に駆り出され、母は病で臥せってしまう。母と祖母、まだ小さい妹を彼女一人で養うことはこの戦時中不可能だ。

そんな時、外から訪れていた富豪の目に留まる。彼女の容姿は村の中では浮いていた。その整った顔立ちと腰まで届く艶のある黒髪は男たちの目を惹き付けた。

富豪も例に洩れず彼女の容姿に惹き付けられ、彼女の身の上を知り高い給金で雇いたいと申し出る。当代風に言うと「家でメイドやらないか？」と紳士からの申し出だ。

家族を養わなければならない彼女にとってこれはまたとない話であった。

富豪の家は高い塀に囲まれ広い庭を備えた西洋風の作りで、彼女の家とは天地ほどの違いがあった。

富豪の屋敷の使用人は男ばかりで同い年の女の子はあまりいなかった。いたとしても数ヶ月もするといなくなってしまう。

屋敷の仕事は朝が早く夜も遅い、きつい仕事だが彼女は辞めるわけにはいかない。寧ろ、これで家族は食べていける、そう思い仕事に励み、自分に仕事を与えてくれた主に感謝した。

屋敷の仕事を始めて一年が経とうとしていたある日。主の元へある荷物が届いた。中身は分からないが、主はその日上機嫌でそんな姿を見ると彼女もまた嬉しくなった。

そんな夜のこと。主から普段立ち入りを禁じられている仕事場である書斎に呼び出された。行ってみると酒を片手に上機嫌な主がい

た。どうやら話し相手がほしかったらしく、一緒に飲むよう勧められた。

普段あまり話す機会のない主と話すのは、自分より一回り以上に年上ということもあり緊張した。しかし、元々主はぽっちゃりとした体型に日向ぼっこが似合う温厚そうな雰囲気の人ということもあってか、打ち解けるのは早かった。

時が経つにつれ、祖父と孫の楽しい語らいのようなそんな空気が部屋に満ちていた。

しかし、彼女はついていない。

いつの間にか寝ていたらしい。寒さを感じ目を覚ます。しかし、手足が動かない。動かない頭で周囲を見渡す。すると手足が磔にされ、自分は全裸になっていた。

異常事態に頭が働き始めた。いや、混乱して働いたともいえず、ただただ手足を動かし助けを呼んだ。

「大丈夫だよ」

突然声が掛けられた。

それは自分の主のもの。そこでようやく状況を確認できるほどには落ち着いた。周囲は薄暗く何本もの蠟燭で照らされていた。部屋のあちこちには何やら不気味な置物や腸のようなものを詰めた瓶などが煩雑に置かれていた。そして、彼女はまた酷く混乱する。部屋のあちこちにこびりつく赤黒い跡と、それが付着した刃物の数々を見てしまったから。

彼女は混乱しながらも震える声で主に聞いた。

「……あ、の、これはどういう、ことで、しょうか？」

主は彼女の状態と反して昨夜のような穏やかな風に返す。

「ああ、ここは私の趣味の場だよ」

「しゅ、み？」

「そう趣味さ」

昨日は温かったその笑顔が、今はとても怖くてならない。

そんな彼女の心境とは関係なしに主はいつもの調子で話を進める。

「私は魔術師でね。ここに取り揃えている道具は儀式のために必要なものなのだよ。まあ皆君のような反応をするものだよ」

「……みん、な？」

「ああ、ほら君と仲がよかったカズ子君も君のように驚いていたよ」

カズ子は2ヶ月前まで働いていた2つ年上の女性で、姉のように頼りにしていた。この状況にいなくなった彼女の名前を聞き、彼女の頭に最悪な予想が浮かんでいく。

「……じゃあ、カズ子さんは？」

「彼女はどうかやら適性がなかったみたいだね。折角神をその身に降ろしてあげたのにその身が耐えきれずに死んでしまったよ。しかし、心配はいらないよ。彼女もあとでちゃんと蘇生させておくよ」

目の前の狂人はとても残念そうに零した。

そう、少ない女が皆数ヶ月ないし長くて半年で出て行っていたのは、この狂人の遊びのために殺されていたためだったのだ。しかし、なぜ彼女は一年も長く生かされていたのか。

「でも、君はその必要はないようだ」

「……え」

彼女はこのふざけた儀式を止めて、この拘束を解いてくれるので

はと思ってしまう。

「君は素晴らしい。掛け値なしに。君を使うのは取って置きに思
い儀式はずっと先延ばしに来たんだ。しかし、今日漸く例の品が届
いてね」

彼女の期待はあっさりと切られてしまい、また絶望の淵に立たさ
れる。

「最初君を見たときから感じていた。君ならば私の儀式を成功させ
る人材だと。だから、私も年甲斐もなく張り切ってしまったね。わ
ざわざ君のためにこれを買収求めたのだよ」

そう言つて、手元の袋へと視線を落とす。細長い7、80センチ
程の長さの袋。

中にあつたものは『刀』。

「これは多くの罪人の首を切り落としてきた刀だね。あの山田浅右
衛門も使った業物らしいのだよ。しかし、これを探すのにも苦労し
たものだよ」

自分はあの刀で罪人と同じく首を切られ死ぬのか？

何も疾しいことなどしていかないのに？

なぜ私にこんな不条理が？

私が死ねば母は、祖母は、妹は？

こんな偽物ではなく、いつもの主はどこ？

死にたくない。まだこんなところで死にたくない。

こんなことはあり得ない。全て夢であるハズだ。

彼女は色々なことが頭には浮かび、また違うことが浮かび、もう

頭の中はぐちゃぐちゃだった。

「さて、そろそろ皆も待ちきれないらしい。儀式を始めようか」
「皆？」

薄暗い闇の向こうには彼女を囲み何人もの狂人達が、今か今かと期待に満ちた狂気の目を向けていた。

刀を持った狂人は鞘からその刀身を引き抜いた。
それを見て彼女は必死になって懇願した。

「お、お願いします！ 何でも、何でもやります！ お給金もいりません！ だか、だから！ お願いします命だけは！」

昨夜と同じように優しく、泣く赤子をあやすかのような温かな声で語りかける。

「大丈夫君は死なない。儀式は成功する。君にはその資質があり、私には成功させる資格がある」

狂人は全く聞き入れない。
刀を振りかぶり、目標を定める。
狙う部位は勿論『首』。

「……ひっく、お願いします……やめて、ください……助けて、たすけてください」

声は恐怖で上手く出ない。

彼女の顔は涙に濡れているにも関わらず彼女は未だ美しい。

「では、儀式を始めよう」

狂人の一言とともに刀は振り下ろされる。

彼女はついていない。

刃は首の皮を裂き、肉を裂いた。しかし、腕は素人。一撃で骨を断つには至らない。

裂けた喉元からひゅうひゅうと空気の抜ける音を立てる。痛みによるショックで死ねず、痛みと共に苦しみながら死んで逝く。

1話 学園都市の警備はザル？

学園都市。東京西部にある人口230万人。そのほとんどが学生という可笑しな街。使用されている技術は外と比べると20から30年の開きがあると言われるほどに科学技術は進歩している。そして、最大の特徴は『超能力』。能力開発と呼ばれるこの都市で行われている授業により学生達は日々超能力の開発を行っている。しかし、超能力とは言っても力の強弱は存在する。最上位のレベル5はわずか7人しかおらず、下位の能力に行くほど数は増え、落ちこぼれとされるレベル0に至っては全体の6割になっている。

そんな6割の中の例外、上条当麻は9月にもなってもまだ暑い炎天下の中を隣人土御門元春の呼び出しのため近くのファミレスへと向かっていた。

「土御門の奴話があるなら自分の家に呼べよな。はあ、不幸だ」

ぼやきながら歩く上条はうんざりとした感じに俯いた。

「にしても暑いな。あゝ早く冷房の利いた場所に行きたい」

下向きで歩く上条は当然前方不注意になるわけで、持ち前の不幸スキルを発動する。

「わっ!?!」

「え?」

曲がり角を曲がって来た人とぶつかる。ベタベタな展開である。

「すみません!大丈夫ですか!」

「あ、はい。平気です」

慌てて謝る上条は尻もちをつく相手へと手を差し出す。相手は彼の手を取り立ち上がる。

上条当麻の不幸はただの不幸ではなく、女の気配がついて回る不幸である。それも相手は美人とくる何とも奇妙な不幸体質である。今回も例に洩れず相手は美人だ。上条よりも少し小さめの少女は整った顔立ちをしていて、今時珍しい腰まで届くほど長い艶のある黒髪。大和撫子といった日本の美というものを感じさせる少女だ。可笑しなことにこの少女はこんな暑い日なのにマフラーを巻いているのだ。

（こんな暑いのにマフラー？それに髪長いなーオレの知り合いって、髪が長い奴多くないか？）

内心そんなことを思いながら、まじまじと少女を観察していた。

「あのどこかしましたか？」

「へ？」

「いえ、私のことずっと見ていたので」

「あつすいません！ぶつかった上じつと見て！」

「そんなことないですよ。こっちこそぼおっとしていましたから。それじゃあ私はこれで」

「あ、はい。すみませんでした！」

そう言つて少女は上条に背を向け去って行く。

同じ年くらいだと言うのに、なぜか年上と話していたかのようなそんな変な感覚を感じていた上条は、少し流され気味に話を切り上げられていた。

（そうだ土御門！ そろそろ時間だし急がねえと！）

約束を思い出した上条もいそいそとその場を後にした。

ファミレスの中は冷房が利いていてまさに天国である。そんな中、土御門は『苦瓜と蝸牛の地獄ラザニア』なるものを食していた。

「いやーカミヤん暑い中ご苦労だにゃー」

「で、なんなんだ用って？てかなんでお前の部屋じゃなくてファミレスなんだよ」

「いやー暑い中歩くのメンドイし、だったらカミヤんに来てもらうと思ったんだにゃー」

「お前の都合かよー！」

「まあそれは冗談で、こっちの方がこれから行く場所に近いからぜよ」

「行く場所？」

「まあそれも含めて今から説明するぜい」

上条は取り敢えず土御門のお冷を一气飲みし、クールダウンして話を聞く状態へと持っていく。

「実はまた魔術師が侵入したんだぜい」

「またかよ！ 学園都市の警備はザルなのか！」

実際つい数日前イギリス清教所属シェリー・クロムウェルが侵入し大暴れしたばかりだ。

「まあ、その魔術師は少し特殊なんだにゃー」
「特殊？」

土御門はラザニアを一口口に運び、間をおいてから話を続けた。

「聖遺物。今回の敵はそれの使い手ぜよ」

「で、それがどうしたんだよ。今までの魔術師たちもそういう感じの道具を使ってただろ？」

「カミやんは魔術に対しては素人だからにやー。まあ今までの魔術師が使っていた霊装はあくまで道具ぜよ。演劇で言うなら魔術師は役者、霊装は小道具だぜい。観客は小道具よりも役者を見るだろ？魔術師は自分の魂から魔力を作り出して魔術を使う。霊装は術式の補助として使っているぜよ」

魔術に詳しくない上条は何となくわかったような、そんな感じに聞いていた。土御門はまた一口食べて続ける。

「だが、聖遺物は人の想念を吸ってそれ自体に意思があるぜよ」

「じゃあ生きてるってことかよ」

「いや、生きているともちがうな、それ単体じゃ何もできない。そもそも聖遺物なんてものほとんどのものは使えない。ある魔術師が作り出した術式があって初めて使える代物ぜよ。カミやんRPGてのは敵を倒せばレベルが上がるよな」

「あ、は？」

いきなりゲームの話題を持ち出した土御門に上条は抜けた返事で返す。しかし、土御門は気にすることなく続ける。

「現実じゃ強くなるにはひた向きな努力と特訓抜きにはありえない。ただ敵を倒しただけじゃ別に強くはならないにやー。でももし、現実とそのシステムが適用されたらどうぜよ」

「どうって、そんなの……ありえないだろ」

「実はあっちゃまうんだにやー聖遺物は想念つまりは魂を吸う。魔

術師にとって魂は魔力を作る源だぜい。単純にそればけじゃないが、量が多ければ多いほど強い術が使える。魂は一人につき一つ。この絶対条件を無視して術を行使できるのが聖遺物の使い手ぜよ。おまけに物理、魔術的攻撃は効かないときたものだ。こんなチートやつてられないにやー」

「ちよつと待て！ そんな相手勝てるかよ！」

「そ、普通はやってられないが。カミヤんの右手にそれは通用しない。それで殴れば相手は普通にダメージを受ける」

「あ、そうか」

そう言つて上条当麻は自身の右手に視線を向ける。彼の右手にはあらゆる異能の力を打ち消す『幻想殺し』イマジンブレイカーが宿っている。例え摂氏3000の炎だろうが、何万ボルトの雷撃だろうが消し去つてしまふ。しかし、某シスター曰く、神の奇跡もまた打ち消してしまっているらしく彼はこの力のせいで不幸になってしまっているらしい。

「ま、話は大体こんなところだぜい。それじゃそろそろ行こうかにやー」

いつの間にかラザニアを完食していた土御門はレジへと向かいながら上条へと言葉を投げかける。それに続く形で上条は席を立つ。

「行くつてどこにだよ？」

「なーにカミヤんも行ったことがある場所にやー」

2話 反則だろ？（前書き）

戦闘シーンです。難しいです。

2話 反則だろ？

学園都市の工業地帯。港の倉庫のようにシャッターが閉まった大きな車庫が建ち並び、コンテナが三階建ての建物ぐらいにまで積み上げられた操車場。ここはかつて、学園都市最強のレベル5『一方通行』^{ラレタレベル6}が絶対能力へ進化する実験の最後の実験場として使われた場所。一方通行はここでの実験までに約10000人のクローン体、^{シスターズ}妹達を殺してきた。しかし、上条当麻の介入により一方通行は敗れ、実験は打ち切れ残り約10000の妹達は救われた。

そんな場所に上条当麻は立っていた。土御門はコンテナの陰で何やらこそこそ作業をしている。待ちぼうけの上条は夕暮れの空を眺めていた。

「よしこんなもんか…待たせたな力ミヤん」

「お前何してたんだよ」

「なに、ちよつと餌を準備してたのだよ」

「餌って魔術師の？」

「ああ、相手は恐らく大量の魂を求めてここに来た。事実この学園都市はついこの間まで10000人の人間が死んでいる。その一部をここに集めた」

「おい！ その魂って御坂妹達だろ！死んだあいつらをお前！」

「放っておいても妹達の魂は奴に取り込まれる。そうなる前に動かないといけない。大丈夫だ。奴が来たら散らせる。そもそも奴に魂を与えてパワーアップなんてさせたら本末転倒だぜい」

「そうか」

魂なんて物本当にあるか上条は分からないが、もしあったとしたら妹達に死んでも危険に晒し続けさせるなんて、彼には許せる行為ではなかった。少し不満げに彼は頷く。

「まあこういう霊的なことはロシア成教とかが得意なんだけどにやー」

「そういえばお前魔術は使えないんじゃないのか？」

「風水には鬼門なんていう鬼が通るって言う方角があるだろ？そういう霊的なものが集まりやすい場所を物の配置とかで人為的に作り出した。それでも風水の専門家なんだぜい」

彼は上条と来る前に既に一人下準備を行いいつでも発動できるようにしていたのだ。そして、つい先ほど最後の配置を行いそれを発動させた。

「にしても、10000人もの人の魂か。これほどの数吸収したら、その強さは計り知れないぜよ」

「ていうか、相手はどんな奴なんだよ。そんな強くなって何がしたいんだ？」

「さあな、でも相手は女で日本人だ。これがそいつの写真だぜい」
「写真あるなら早く見せろよ」

そう言って土御門から写真を受け取る。

写真の人物は確かに女で日本人だった。それもとびきり美人ときた。

「名前は知らないが、無所属の魔術師だ。姿と聖遺物を使うこと以外情報はほとんどない。それにオレ達も聖遺物についてはあまり詳しくない、気を抜けない相手だ」

そこで操車場に一人の人物が現れた。その人物は写真の女。自分たちとそう変わらない年齢の少女。整った顔に腰まで届くほど長い黒髪。その首にはまだ暑さが続くのにマフラーを巻いる。上条が昼

間出会った少女である。

「あら、あなたは確か昼間の？」

「またかカミヤん！」

土御門は即座に攻撃に移る。しかし、その対象は上条当麻、彼である。

「ちょっと待て！ 何でオレ！？」

「うるせえ！ 上条建設！ テメエいくつフラグ建てりや気が済むんだ！ オレの、いや男の敵はお前だ！」

「とか言いつつ魂は散らすんですね」

既にこの場に集まっていた妹達の魂は散り始めていた。誘いだされたというのに余裕を見せる彼女に土御門は目を細める。

「随分と余裕だな魔術師。今からでも少しは魂を取り込めるだろ？」

「だってあなた達も私の救うべき人たちですもの。救ってからでも遅くはないです」

「救う？」

彼女の言葉に上条が反応する。

彼女は優しく微笑みながら上条の疑問に答える。

「ええ、この理不尽な世界からあなた達も救ってあげます」

「つまり、オレ達も殺すから関係ないと」

そう言って土御門は臨戦態勢に入った。それに対し彼女は聖遺物と思えるものは何も持たない、自然体のまま応じる。

「大丈夫。大人しくしてくれたら痛みなっで感じさせませんよ。痛いのは嫌だものね」

言い終わらない内に土御門は彼女に向かって駆け出す。上条もそれに続いて走る。互いの距離は10メートルほど、すぐに距離は縮まっでいく。しかし彼女は動かない。

「残念です。極力苦しめないようにしたかったのだけれど」

異常は起きた。

空氣が変わった。息がくるしい。上手く呼吸ができない。

物理的なものではない。まして魔術的なものでもない。それは同じく苦しむ上条を見れば分かる。ではこれは？

彼女の纏う空氣が変わったのだ。いや、抑え隠していた彼女本来の空氣が漏れだした。

上条よりも長く戦いの場に身を置く土御門ですら嫌悪を感じる霧困氣。土御門は感じていた。

この女は、狂っている。

「じゃあ、まずはあなたから」

そういつて彼女は先行していた土御門に歩み寄り掌底を放つ。それは何の工夫もない一直線の拳。しかし、速度が決定的に違っ。まるで砲弾のような拳は土御門の頭部を捉えていた。

躲せない。

土御門はそう直感した。

「あら？」

意外そうな声を発する少女。

土御門は10メートル以上飛ばされコンテナに激突していた。

土御門は拳が直撃する直前、自ら相手の腕に拳を打ち込んだのだ。尋常ではない速度の拳は触れただけで全身を吹き飛ばされた。お陰で打ち込んだ左腕の骨は折れコンテナにぶつかった衝撃で肋骨を折ってしまったが、即死は免れた。

「カミヤん！」

土御門の必死の声で我に返る。拳を握りしめ少女へと殴りかかる。

「お、おおおおおおおおおおおおお！」

少女は微動だにしない。

先ほど放った拳に耐えうる程度に丈夫でなければ自らの攻撃で拳を砕いてしまうのだから、高い防御力も持っていて当然だ。よってただの高校生の拳など避ける必要はない。

ただの高校生であつたなら。

「ぐうつ！？」

上条の拳は少女の顔に直撃し、少女は数メートル先へと飛ばされた。

少女に動きはない。

「はぁ……はぁ……はぁ……っ！ 土御門っ！！」

上条は数十秒の間未だ現状が信じられず茫然とした後、土御門の元へと駆ける。

「ッ大丈夫だ。それより、こんなことはもうあり得ない。奴が起きる前に、次の手を打たないと　　ッ！」

そう、今回は上条当麻の『幻想殺し』を知らなかったから拾えた勝利。相手はもう油断してくれない。次はないのだ。彼女が目覚めるまでに何か打開策を講じなければ確実に殺される。

「んなこと言っていないで！　とにかく病院！　病院にいくぞ！」

「クソッ……聖遺物について……情報は、少なかったが……まさか……ここまで反則だとは……これじゃあ……聖人の、神裂ねーちゃんでも……呼んでおくべきだったにや！……」

3話 拘束完了

「そう、そうだそこを掴むんだ」

「こっつ、か？」

「ああ、良いぞカミヤん」

土御門は病院のベットの上で上条に指示を出す。上条は慣れない手つきでその指示に従う。

「土御門、オレ初めてでこれでホントにいいのか？」

「大丈夫だぜいカミヤん初めてにしては上出来だぜい」

「あなた達は何をしてるのです？」

「ああ、おはよう」

「なにあんたを拘束しているだけだぜよ」

「拘束……だけどこんなもの　　へ？」

移動中彼女の処遇について考えた結果、暫定的措置だが上条が抑えつけることに決まった。彼が触れている限り彼女は年相応の少女ほどの力しか持たない。策をなんだと言っていたが上条が触れていれば彼女はなんの力も持たない少女だ。彼女の力はインパクトが強すぎてそんな簡単なことにも気付くのに大分時間を要した。

「力が出ないだろ？　その程度の力じゃ土御門さん直伝の拘束からは逃れられないぜよ」

「お前ただ指示出してただけだろ。とはいってもいつまでもこのままってわけにはいかないけどな」

土御門の所属する『必要悪の教会』ネセサリウスからの応援が来るまでの間彼

はずっと彼女を抑えつけなければならない。

「オレはこの状態でアンタを殺しても構わないんだがカミヤんに止められてにゃー。応援が来るまでアンタにはいくつか聞いておきたいことがある」

今の状態であれば土御門の拳もこの少女には通用する。殺すことは簡単だが上条が反対したのだ。必要悪の教会でも聖遺物はほとんど未知のマジックアイテムである。そのサンプルが手に入るかもしれないとなり、応援をよこすことが決定し現状維持を通達した。

「まずは名前から。呼び方、魔術師じゃ不便だろ？」

「藤巻ハル子、ちなみに魔術師ではないですよ。聖遺物は使いますが魔術を使ったりはしませんから」

「魔術を使わない？」

土御門は疑問を口にし、藤巻は笑顔で答えた。

「私は元々魔術なんてものにはまったくの素人です。聖遺物以外に魔術的なものは扱えませんよ」

「じゃあなんで聖遺物なんてものを使える。それは特殊な術式なしには扱えない」

「これは頂いたものですから」

「誰にだ？」

「カール・クラフト」

「ッ!？」

その名前に土御門は凍りついた。史上最低の魔術師アレイスター・クロウリーと同様に、死んだとされていながらも必要悪の教会に専用の部署を設け今なお追われている人物『カール・クラフト』。

「奴は今どこにいる!？」

「さあ、最後に会ったの何十年も前ですし」

「何十年って……だってお前オレ達とそんな……」

今度は上条が疑問を口にする。

一旦落ち着くため土御門は深呼吸する。

「まず第一にお前は何が目的だ？」

「魂の救済です」

「それは魂を取り込むことか？」

「はい」

「そのどこが救いなんだ？」

「あなた達には分からないことです」

「次だ。オレ達とそう歳の変わらないお前がなぜ数十年前も前にカール・クラフトと出会ったという」

「聖遺物を使うと肉体の老化は止まってしまうんです。これでもあなた達より一回りも二回りも年上なんですよ」

「カール・クラフトの現在の所在は？」

「先ほども言ったように分かりません」

淡々とした問答。どれくらい本当なのか証拠なんてないし、土御門は正直全てを信じてはいなかった。聖遺物で老化が止まる不老不死の話など馬鹿げたことを信じるよりは、学園都市の七不思議の一つ『月詠小萌』のような存在だと思った方がまだましである。そもそもそんなもの自体作り話で、実際はほんの数年前の出会いなのかもしれない。とにかく証拠がないためあまり役立つ情報ではない。

「はあ……まあいい。本格的な尋問はイギリスで行われる。あとオレ達にできることは逃げないように見張っていることだ。カミヤん

その手絶対に話すなよ」

「お、おう」

もう敵は油断していない。もし少しでも緩めて拘束から逃れられたら二度と捕えることはできず、それどころか今度こそ二人の死が確定するだろう。

「今夜は寝ずの番だぜい。頑張れカミヤーン」

「お前他人事じゃねーんだぞ」

外はすでに日が沈み切り、時刻は深夜1時である。

今日は帰れないことをインデックスには伝えてある。のこの出向いてこないよう友人と泊まり込むと嘘まで吐いて。

「で、応援はどれくらいで到着するんだ？流石に一日中だとトイレとかきつくなるぞ」

「数時間で神裂ねーちゃんが到着するぜよ。それまでカミヤンには頑張ってもらうぜい。大丈夫トイレに行きたくなったらここでできるにやーほら尿瓶」

「オレは女子の前でする変態にはなりたくない」

「いやいや、世の中経験ぜよ。スリルを味わえカミヤン」

「あの、もう話はいいです？」

二人が軽口を言い合っていると、組み敷かれている藤巻が声を掛けて来た。

「私はそろそろ行きたいのですが、ウニみたいな頭の…カミヤンさん退いてもらえますか？」

「上条当麻だ！ そんなことできるわけないだろ」

「ですが私にも予定がありますので」

「藤巻、お前はあと数時間後にイギリス清教に引き渡される。それまでそこで大人しくしている」

「私は構わないのですが、でもこの街が壊されるのを黙って見ているのは少々気が引けるのです。仕方ありません。私の用件は後にします」

「ちよつと待てそれはどういうことだ？」

不穏なことを口にする彼女に上条は聞いた。彼女は先ほどから変わらず温かさすら感じる笑みで答えた。

「いえ、この街には多くの魂が停滞しているようなので来てみたのですが、先客がいたようです。侵入者も最初は別の目的でこの街を訪れていたのですが感づいてしまったようで、本来の仕事のついでにここの魂を取り込もうとしているようです」

「じゃあこのまま侵入者を放っておいたら、そいつとんでもなく強くなるんじゃない？」

「いえ、ここの魂達は生きることと死ぬこともなんとも思わない。質の悪いものばかりですから全て喰らっても然程強くなることはないと思いますよ」

もちろんこれは彼女の基準であり、たかが10000の劣悪な魂を得た程度の相手などどうということはないということ。普通の人間にとつては脅威であることに変わりはない。

そして、彼女はそうなってしまう者ですら、喰らおう《救おう》と考えている。喰らった相手を喰らえばいいだけなのだ。そして、その過程で犠牲になった魂もまた喰らって救済する。それが彼女の考えである。

「待てカミヤん。その話が本当だって保証はない。ここから逃げるための嘘かも知れない」

「あら、報告は受けていないということは、相手は侵入に関しては余程の玄人ですね」

「藤巻、仮に他に侵入者がいたとしても学園都市も甘くはない。オレ達に話が来ないということは別働隊が当たっているってことだ」

その時窓の向こうで爆発が起こる。ここからは距離があるが何やら大きな施設のようなようだ。

「そのようですね。私は学園都市を侮っていたようです。まあしかし、勝てるかどうかはまた別ですけど」

4話 別働隊（前書き）

スクールの登場です。

4話 別働隊

その日もいつもと変わらず統括理事会から任務の依頼があった。暗部組織『スクール』茶髪のホスト高校生垣根帝督はうんざりしながらも依頼内容に目を通しは面倒臭そうに頭を掻く。

「はぁーまた外からの侵入者か…… どのいつもこいつもバカばかりだな」

学園都市の科学技術は外と比べて20年から30年の開きがあり、その技術を手に入れられたら企業は大きな利益を得られる。そんな企業の人間達は技術を盗み出そうと日々侵入を試みている。しかし、それらは暗部組織が丁寧な接客で応じて消えていただいている。それなのに身の程を知らない人間達は後を絶たず日々侵入を試みるのだ。

「全く今回はどこの企業の営業マンだ？」

「さあ？資料は写真と相手の現在の予測地点だけだし」

垣根の疑問にドレス姿の少女、メジャーハート心理定規が答える。

「なんだこいつ貧相な面して軍服なんか着てやがる。サバゲーマー？」

「……」

ゴーグルを頭に付けた男は写真を見て笑い、その隣のライフル銃を持つ男はジッと写真を見つめていた。

「まあやることは変わらねえ。さっさと行って消してくるぞ」

とある研究所の一室。長い手足の貧相な顔をした軍服姿の男はパソコンと向き合いながら、醜く微笑んでいた。現在本来の目的である情報の入手を行っている彼だが、決して目的を達したことで気が緩んでいるわけではない。彼もプロだ。敵地の真ん中で気を抜くなどという愚は犯さない。

「この街は実にいい。感じ取っただけでも数千もの魂が野放しにされている。これほどの魂ただ漂わせておくには惜しい。ワタクシが有効に使って差し上げましょう。……そして、貴方の分もね？」

そう彼は常に気を張り巡らせ背後に立つ人物には既に気づいていた。

学園都市レベル5の第二位暗部組織『スクール』所属垣根帝督。

「おっさんずいぶん楽しそうに独り言零してたが、もういいのか？」

「ええ、仕事は今終わりましたので少々食事に行こうかと思っただところでした。どうです？ 貴方も付き合ってくださいますか？」

「生憎おっさんとイチャつく趣味はねえよ」

「それは残念。ではワタクシは他の誰かを誘うといたしましょう」

「慌てんなよおっさんイチャつく趣味はねえが、こっちも仕事なんだ。少し付き合ってもらうぜ」

そう言って垣根は白い翼を展開させた。それを貧相な男は興味深そうに見つめる。

「ほう……なかなか面白いものをお持ちのようだ。しかし、貴方にそれは似合わない」

「安心しろ。自覚はある」

垣根は翼の一つを貧相な男へと放ち、男はそれを悠々と避ける。

「中年にしてはなかなかやるな。流石はエセ軍人^{サブゲーマー}てどこか？」

「残念ですがワタクシは軍人^{プロ}です」

「そうか」

垣根は気にせず二撃三撃と翼を放つ。男は同じように躲し垣根へと距離を詰めて行く。垣根も次第に攻撃の手を激しくさせてゆく。しかし、それでも躲す男に垣根は内心焦っていた。

普通の人間なら既にこの翼で胴を真つ二つにしている頃。それなのにこの男は今なお余裕の表情で躲してゆく。しかし、垣根の焦りはもつと別、これまでの暗部で得た経験からの勘ともいえる、そんな不確かな予感。

（こいつ……何か引つかかりやがる。なにを隠している？）

「そろそろ、こちらも攻めさせていたどころ」

「ッ！？」

突然だった。垣根の首を何かが絞めつけた。首以外にも手足を何かに拘束された。

男との距離はまだ５メートルもある。男はこれといって怪しい動作はしていなかった。ではこれは？ いったい何が自身の首を絞めつけている。

「貴方程度、活動位階で十分対処できる。苦しむ姿じっくり見物させていただきますよ」

ギチギチと手足と首が絞めつけられる。垣根は現状を理解できず次第に視界もぼやけてゆく。奴の言う活動位階なるものが何かは分からない垣根だった。しかし、ただ一つ理解できていることがあつ

た。

「……………」

「ん？何か遺言でも？」

「……………っねッえ……………！」

「まあいい聞いてさしあげますよ」

そう言つて首の絞めつけが緩む。垣根は息をいっぱい吸い男に向けて言う。

「なめてんじゃねえぞ！ 格下があああああ！！！」

垣根は翼で拘束されている部分を払う。何に拘束されているかは分からないが、とにかく振るえばその何かに当たるだろう。その考えの通り翼は不可視の拘束に当たり垣根は自由になる。それに初めて男の余裕の表情が消え、驚愕の色へと変わった。

「……………なぜ、拘束が？」

「オレの未元物質に常識は通用しねえ！！！」
ダークマター

垣根の翼は男へと直撃した。

「グぬう……………」

しかし、男も直前で身を捻りそれを躲す。脇腹を抑え込み痛みを耐える。そして、痛みには耐えながらも男は笑う。

「確かに常識は通用しないらしい。聖遺物を使う者は聖遺物でしか倒せないという絶対条件を無視している」

「なにを又力しているかは知らねえがデメエは殺す。格下なら見逃

すこともあるが、オレを格下に見やがつてエ!!」

垣根は先ほどまでと比になら猛攻を仕掛けていた。男はそれをギリギリで躲す。その顔には先ほどまでの余裕はない。

「……ワタクシも本気を出した方がいらしい」

「そんなもの出す前にテメエは終わりだアあ!!」

垣根の六枚の翼が男を前後左右から包囲し迫る。逃げ場はない。これで終わりだ。そう確信した。

「^{形成} Yetzirah」

垣根の耳にその言葉が届いた瞬間全ての翼は微動だにせず動きを止めた。

垣根は目を凝らし観察する。翼には極細のワイヤーが絡まりその動きを封じていた。先ほどの不可視の拘束もこれだと理解し同様に引き裂こうとする。しかし、

「無駄ですよ。先ほどの活動とは強度も切れ味も比べ物になりません」

ワイヤーは切断できずそれどころか、翼がピクリとも動かない。

「歴史こそ浅いもののワタクシの聖遺物『^{ワルシャワ・ゲット}辺獄舎の絞殺縄』からは逃げられません。同胞ゆえ試したことはありませんが、^{せいさんはいげいか}聖餐杯猊下ですら一度捕まれば抜け出せないと自負しております。貴方のような方にこのワイヤーは断ち切れませんよ」

ワイヤーに引かれ翼が動く。中には腹以外は無傷の男が立っ

た。

「ワタクシに形成を発動させた貴方に敬意を払い名乗らせていただく。ワタクシは聖槍十三騎士団黒円卓第十位ロート・シュピーネ。以後お見知りおきを、とは言ってもここで貴方とはお別れですがね」

高らかに名乗りを上げシュピーネは腕を振り上げる。その指先には極細のワイヤー、それを翼を拘束され動けない垣根へと放とうとする。垣根は何とか翼を動かそうと試みるが翼はやはりピクリとも動かない。

「生身の人間にしては貴方はよくやった……ですがこれで終わります」

シュピーネはその腕を振り下ろす。

しかし、突如部屋のガラスが割れた。ガラスを砕いた弾丸はそのままシュピーネの頭へと命中した。シュピーネは無傷で倒れることはなかったが、動きを止めた。

その銃撃は『スクール』の狙撃手砂皿緻密によるものだ。狙撃位置は彼には珍しい向かいのビルという距離から。

「……全く、空気を読まないクズが……」

忌々しそうにシュピーネは呟く。しかし、砂皿は気にすることなく二撃目を放とうとする。しかしそれもまた彼には珍しく先ほどとは違う得物。ロケットランチャー。

(……こういう得物はあまり使いたくはないがな)

放たれた弾は垣根とシュピーネがいた部屋に着弾した。砂皿は着弾を確認する前に既に撤退を始めていた。あの一撃で倒せるとは考えていない。垣根が逃げる一瞬を作ればそれでいい。

「ふむ。どうやら逃げられてしまったようですね」

吹き飛ばされた部屋でシュピーネは一人零す。垣根はあの瞬間翼を消し拘束を逃れ着弾する前に逃げおおせた。しかし、敵を逃がしたにも関わらずシュピーネは気にすることなく歩き出す。

元々彼はついでに垣根の魂も喰らっておこうとしたに過ぎない。彼を殺さずともここには数千単位の魂が野放しに漂っているのだから、腹の傷もそれを喰らえばどうということはないのだから。

5話 取引

爆発から数分後土御門の携帯に統括理事会からの連絡が入る。その知らせに土御門は焦っていた。

自分はこのありさまで奴らに有効な上条当麻は今手離せない。暗部でも有数の組織の撤退。そして、侵入者はこちらに向かっているという報告。

「よりもよって何でこっちに……」

「恐らく、私がいるからでしょうね」

組み敷かれる藤巻は土御門の疑問に何気なく答えた。

「どういう原理か知りませんが、今は彼、上条さんの力で随分抑えられています。元々私も相当数の魂を保有しています。相手はここに数百単位の魂があると感知してきたのでしょうか。普通はこれだけの数が一か所にあれば不審に思いますが、この都市には数千もの魂があるんです。数百なんて極一部一か所に集まっても可笑しくありません」

魂の集まりやすい場所は存在する。学園都市にもいくつかさういふ場はある。その中の一つである病院、人の死は珍しくない場だ。魂が集まっても不審ではない。

「それじゃあそいつは勘違いしてここに向かっているのか？」

「カミヤン原因は何であれこの状況はまずいぜい。オレはこのざまでカミヤンも手を離せない。正直これじゃあ一方的に殺されるぜよ」

「そこで提案なのですが、私を放してくれたら貴方達を守りましょう。このままでは無力な私も殺されてしまいますから」

「……………」

土御門は思案していた。この状況で藤巻が戦ってくれるのは、先の戦闘を経験しているからこそかなり心強い。しかし、元々もう一人の侵入者は彼女の協力者で今は単に彼女を助けに来ているだけとしたら？ 戦った後今度は彼女がその魂を得ようと動いたら？ そもそも解いた瞬間にオレ達は殺されないのか？

「ダメだ。拘束は解けない」

土御門は彼女を信用していない。彼女がなにをするか分からない。そんな運試しは最後の手段だ。今は他に手がなかそれを考える時間はわずかながらあるのだから。

土御門は策を講じる。

ここから彼女を連れて移動する？

いずれは傷を負っているこちらが追いつかれる。

魔術を使って迎撃する？

そいつに魔術は通用しない。

上条当麻に戦ってもらう？

今は手が離せない。

彼の頭は様々な策が浮かんでは消えてゆく。どれも有効とは言えない愚策。土御門は内心毒づいた。

「おやおや、大量の魂を感じて来たのですが何やら面白そうな状況ですね」

声がしたのは窓の方から。そこには手足の長い貧相な顔をした軍服姿の男が張り付いていた。

「いたいけな少女を力で屈服させるなど、ワタクシ好みの状況じゃ

あないですか」

シュピーネは窓を割り中に侵入し室内を見渡す。こんな少女を組み敷いている状況だ相部屋であれば大騒ぎだ。ここには上条、土御門、藤巻の三人と侵入してきたシュピーネのみ。見渡したシュピーネは下卑た笑みを浮かべる。

この時点で土御門に良策なんてものはない。

「なるほど、これほどの魂だ。この中の何者かはワタクシと同類か……まあ誰かは考えるまでもありませんが、どうでしょう取引しませんか？」

「取引……だと？」

その言葉は上条に向けられていた。

シュピーネの一言に上条が反応し、シュピーネは笑みを深める。並の方法では傷を負わない彼らだ。ベットにいる土御門は違う。組み敷かれる藤巻も論外だ。消去法で答えは上条になってくる。

「ええそうです取引です。実はワタクシ今日はある仕事でこの都市を訪れていたのですが、この大量の魂質は悪いが中々の量、お互いに分けても数千もの魂が得られる。ワタクシは無駄な戦いは好まないでしょうお互い手を組みませんか？」

シュピーネは上条が聖遺物を扱う者と勘違いをしていた。この状況上手く話を運べば戦わずにいられそうだ。

「その取引いいな。オレも戦ったりするのは嫌いだよ」

「ふむ、では……」

「けどなッ！」

シュピーネの言葉を遮り上条は怒りを向けて続ける。

「オレは友達を犠牲にしてまで、安全地帯から傍観したくない！！
……質の悪い魂、か。確かにアイツらは自分達をモルモットって
言ったよ。死ぬために造られたって分かってたよ！ けどなッ！
アイツらだって必死に生きてたんだよ！ そんな魂^{ヤツ}を劣^ひってるなん
て言うんじゃない！！」

シュピーネは妹達の命をただ『物』としか見ていなかった。そんな人を食い物にする人間を上条当麻は許せなかった。

「そうですか。交渉は決裂ですか。残念です」

シュピーネは詰まらなそうに、ただ詰まらなそうに呟く。

「おい藤巻…信じているからな」

「おい！ カミヤン！」

「あら、放してくれるんです？ けど裏切るかもしれませんよ」

「そうになったらテメエもまとめて倒すだけだ」

「……そうですか。大丈夫、私は嘘を吐きません」

上条は力強く言い切り、藤巻は微笑み答える。

「お話はもうよろしいですか？」

「ああ、いいぜ。人の命をそんな風に思っているテメエの幻想はオレ達がブチ殺してやるッ！！」

6話 戦場の怪談

シユピーネとの戦闘後、垣根達『スクール』の面々は暗部所有の車に乗り込み無事撤退しアジトへと移動していた。命の危険からは脱したが車内は別の意味で危機的状況を迎えていた。

シユピーネに一撃を入れたものの格下に見られたまま逃げたために不機嫌オーラ全開の垣根。垣根を助け出すというフライングプレーを行った砂皿は、浮かれるわけもなくいつものようにだんまりである。そんな気まずい空気の中、心理定規と頭にゴーグルを付けた少年は互いに窒息しそうな空気を何とか和らげようとする。

「い、いやーでも砂皿さんのあの援護は流石だったスねー……」
「……ああ」

砂皿はそれっきりまただんまりだ。ゴーグルの少年は苦笑いを浮かべつつ、もっと話せよと心の中で叫んでいた。

「で、でも準備いいわよねー。砂皿っていつもライフルじゃない。よくロケットランチャーなんて用意していたわね」
「……」

心理定規の言葉にもむつつりを貫く砂皿。彼女もゴーグルの少年と同じく苦笑いを浮かべ心の中で泣いていた。しかし、少し間をおいて砂皿が口を開く。

「……昔、戦場にいた時のことだ」

普段あまりしゃべらない彼が口を開いたのだ。

「同じく雇われていた傭兵がいてな、そいつはおしゃべりでとてもこの仕事には向いていない奴だった。そんな奴が暇つぶしにこんな話をした」

傭兵の砂皿はこれまでに数々の戦地を渡り歩いてきた過去を持つ。あまり過去を語らない彼が珍しく口を開いたのだ。窒息しそうになつていた二人はこれが希望の光に感じられた。

「戦場ではありがちな怪談話だ。アルビノの軍人を見たら戦わずに逃げる。その兵士は亡霊で戦ったものは死体も残らない。そんなありがちなものだ」

「……それがどうかしたんスか？」

「……その軍人はドイツ軍人らしい」

「それって……あのシュピーネとか言う奴も……まさかそれである装備を!？」

そんな怪談話程度である装備を持ち出したのかと心理定規は驚いていた。

「……写真で奴を見た瞬間その怪談を思い出したことと、こいつは何か違うそういう直感のような、いや、そうだと知っているという既知感のようなものを感じたんだ」

話はそれで終わった。

話が終わると車内は最初とは違った沈黙に支配される。アジトまでの距離はあと7kmだ。

7話 偽装と正体

病院の中庭には至るところへ極細のワイヤーが張り巡らされ、三階の病室からはそれはまるで蜘蛛の巣のように見えた。シュピーネは巣の中央で蜘蛛のように這いつくばり病室を見つめる。彼の顔に先ほどの余裕はない。

恐怖するシュピーネはここで自身の誤解に気づく。

一つ目は、聖遺物を扱うのは組み敷いていた少年ではなく、組み敷かれていた少女であったこと。

二つ目は、彼女の魂の保有量は自身と同程度の数百ではなく、更に上の数千単位であったということ。

三つ目は、彼女の空気。その偽装に騙され彼女を普通の少女と誤解していたが、実際その本質は彼の恐怖する大隊長や双首領らと同じ『狂人』の類であったということ。

上条の拘束が解かれた藤巻は未だ病室でゆっくりと窓へ歩み寄っていた。

「大丈夫。あなたも救ってあげますよ」

割られた窓から中庭に降り立つ彼女は安心させるような笑みで囁く。

病室で彼女の後ろ姿を見ていた上条と土御門はシュピーネ同様硬直していた。一度彼女の空気は体感していたが、あの不気味さには一度や二度じゃ慣れられないし、慣れたとしてもそれは人間として大事な何かを捨てるようなものだ。

「あまり騒ぐと人が来てしまいますから。早めに終わらせましょうか」

「!?!」

藤巻は砲弾のような速度でシュピーネへと向かう。しかし、彼女はまたしても聖遺物らしきものは何も持っていない。

「くうっ！」

それでも藤巻はシュピーネの放つワイヤーを掻い潜りシュピーネに傷を負わせていた。傷を負わせたにも関わらず藤巻の手に武器はない。

「首を断つつもりでしたがギリギリで身を引きましたか。すごいですね」

「……はぁ……はぁ……はぁッ」

賞賛の言葉にもシュピーネは答えない。今も彼はこの状況から脱することしか考えていない。

自身は聖遺物の形を具現化した『形成位階』。対して相手は聖遺物の特性を発揮するだけの『活動位階』。先ほど首を捉えた不可視の斬撃より、形成位階である自身のワイヤーの方が殺傷能力は上であるハズなのに、勝てる気がしないのだ。

首から伝う血が一滴地面に落ちる。それを合図に藤巻はまた砲弾となってシュピーネへと迫る。シュピーネは両腕を引きワイヤーを操る。すると中庭の木々を結んでいたワイヤーが動き、全方位から彼女へ迫る。しかし、シュピーネはこれでも殺せるとは思わない。これで逃げる一瞬の隙を作ればいいのだ。

「ガアああああアアアアアアアアアア！」

彼の必死の応戦にも彼女は止まらない。殺傷能力で劣るハズの活動位階の斬撃で形成位階であるハズのシュピーネのワイヤーの数本

を断ち切ったのだ。シュピーネは神経を断たれたかのような激痛に苦しみ叫ぶ。

聖遺物を扱うものはその武器が破壊されれば武器と同等以上のダメージを負う。もしここで全てのワイヤーを断たれていたら、シュピーネはそこで絶命していた。

ワイヤーを切断し迫る藤巻が狙う場所はまたしても『首』。

苦しみながらも全力で後ろに飛び、放たれた斬撃を避けるシュピーネ。

「
つあああ」

着地に失敗し地面を転がるシュピーネは激痛で立ち上がることもできない。ワイヤーはまだあるが、もはや彼にこれ以上の戦闘は不可能なのは誰が見ても明らかだ。

「流石にもう無理ですね。あなたはよく頑張りました」

「ヒイあ……ガアアあああ……」

終わった。

彼はそう思った。そもそも彼女と戦って勝てるわけがないのは理解していた。ならば逃げることに全力を注げばとは思っていたが、結果はこの様。

このような劣悪な魂に目もくれず任務終了後帰還していたら、こんなことにはならなかったのに。

ワタクシはこんなところで終わるのか？

未だツアラトウストラは現れてもいないのに、散って逝ったあの二人と同様ワタクシは終わるのか？

様々な考えが走馬灯と共に彼の頭を過ぎていく。しかし、次に彼の耳に響いた言葉によってそれは中断させられる。

「取引しませんか？」

「……とり、ひきイ？」

その場にいた者全員が藤巻を凝視する。

「この街を漂う魂から手を引くこと。そうすれば見逃してあげますよ」

「藤巻！ お前……」

「いいでしょう！ その取引応じましょう！！」

上条の声を掻き消しシュピーネは必死の声で答えた。当然だ。彼にとつては地獄の底に垂れた蜘蛛の糸。この状況から唯一這い上がれるかもしれない希望なのだ。

「そうですか。では交渉成立ですね……あとは逃げるなり、お好きにどうぞ」

「ヒッイ！」

藤巻がそう言うつとシュピーネは一目散に逃げだし、その姿はもはや闇の中へと消えていた。

彼女の救済の対象は全ての魂。生者と死者の違いは一つ、『可能性』だ。死者と違い生者であればこの世界の理^{システム}不尽を何かしらの方法で崩せるかもしれない。ましてシュピーネは彼が選んだ騎士の一人。弱者ではあるが何かしらの役割を持っているはず。救済にはまだ早い。

一つの脅威は去った。しかし、さらに凶悪な脅威が上条達の目の前に未だ残っている。

「おい藤巻、お前何のつもりだ？」

「あ、いえ。この魂についてはなにも約束はしてませんし、私の好きにしようかと。いけません？」

彼女は何か悪いことでもあるのかと本気で聞いてきている。

藤巻の答えは土御門の予測していた通りのものだった。最悪な予想が当たり土御門は舌打ちし、上条は「そうか」と答えるだけだった。

上条当麻は揺るがない。

彼女を開放するときに言ったことを体現するだけだ。

「なら、今度はオレ達が相手だ」

藤巻の背後。

シュピーネが消えた闇の向こうから上条が待つ増援、神裂火織が現れる。

7話 偽装と正体（後書き）

そろそろ長期の休みも終わるので更新ペースが少し遅くなると思います。

8話 ギリギリの攻防

上条達が藤巻を捕えた直後、イギリス清教は土御門の要請により神裂の派遣を決定させた。しかし直後、学園都市からシュピーネの存在を報告されイギリス清教は派遣を急いだ。

土御門は負傷し上条も戦えない状況。もし今上条達がシュピーネと遭遇するようなことがあれば全滅は免れない。しかし、増援を急がなければならないが、魔術的な移動法を用いても到着に時間が掛りすぎる。そこで学園都市は足を提供した。

アレキスター
学園都市にとって今上条を失うことは計画に大きな支障をきたす。フラン
よってこれを避けるたに行われた協力。

学園都市が提供した足とは……

最大時速7000キロオーバー。

日本と西欧の間をおよそ2時間で突っ切る怪物飛行機だ。

「確認します。報告にあつた聖遺物を扱う人物とは貴方ですか？」
「どの人物を指しているかは知りませんが、確かに私も聖遺物を扱いますね」

このタイミングで来てくれた神裂に上条は心強さを感じていた。
策などない今勝利率は少しでも欲しい。

「人払いは済ませていますね。これで思う存分戦えます」
「そうですか。上条当麻これは人の戦いではありません。貴方は離れていてください」
「いや、オレも戦う」

神裂は知らない。聖人である自分なら彼女に傷を負わせられると

思っているのか、それは全くの勘違い。この敵に上条抜きで立ち向かうのは愚の骨頂。彼は現状唯一の対抗手段なのだから。

「お前は知らないんだ。藤巻は普通じゃない」

「それは分かっています。だから貴方は……」

「分かっただけよ！ 藤巻をどうにかするには、お前一人じゃダメなんだ！」

神裂は藤巻が放つ狂気を感じて判断しているのだろう。しかし、それでは分かっているのだ。

神裂も上条の意志が伝わったのか、腑に落ちないながらも頷く。

「……分かりました。上条当麻、策はありますか？」

「いいや」

「……そうですか」

答えはとても頼りないものだったが、彼の顔は彼女の友人を救った時と同じものだった。それを見て神裂火織は彼の力を借りよう、きつと上手くいく、そう思った。

「痴話喧嘩はもうよろしいですか？」

「そんなものしてません！？」

神裂は顔を赤くし抗議する。

この殺し合いが始まる瀬戸際で藤巻は依然余裕を崩さない自然体。その聖遺物は未だ顕現されず活動位階のままなのだ。

聖遺物の位階について知らない上条でも、相手がこちらを低く見ていることは容易に読み取れた。その油断をつかない手はない。

「では、開戦の狼煙と共に我が魔法名を

――救われぬ者

に救いの手を《Salveree000》!!」

「救われぬ者に救いの手を、ですか。全く初めて見たときから思っ
ていましたが、あなた……」

神裂は名乗りと共に唯閃を発動させ彼女との距離を詰める。

藤巻も腰を落とし力強く前方へ飛ぶ。

「わたしとキャラが被ります」

二人がぶつかる。

神裂の神速の抜刀『唯閃』を藤巻は右手で受け止める。

「貴方みたいに狂っているつもりはありません！」

神裂は続けて二撃目を放つ。藤巻は躲し左手を神裂の眼前へと構える。神裂は刀を納めながら高速で後退し放たれる斬撃を躲す。頬を切られたが気にすることなく、呼吸する暇も与えずまた神速の抜刀で斬りかかる。藤巻はそれを左手で受け止め感嘆する。

「流石は聖人ですね。私についてこれるなんてそうはいませんよ？」
「ですが貴方は全く堪えていない」

そう神速の連撃を受けても藤巻は無傷。

聖遺物は聖遺物でしか倒せない。神裂は彼女にダメージを与えられないが、それは彼女の役目ではない。

神裂が斬りかかる藤巻の背後から上条当麻は右手を振るう。

「　　ッもうその拳は受けませんよ」

藤巻は横合いに抜け上条の拳を回避する。

神裂の役割は動きを封じること。傷は負わせることはできずとも力だけは拮抗している。彼女にできるのはこの程度だが、上条が決定打を決めればいい。

神裂は間髪容れずに上条と藤巻の間に入り神速の抜刀を放つ。刃は藤巻の側頭部に直撃し彼女はバランスを崩す。続けざまに神裂は藤巻の鳩尾に蹴りを入れ、彼女を十数メートル蹴り飛ばした。当然藤巻にダメージはなく、気にすることなく立ち上がる。

この間上条は何が起きたか見えていない。気づけば藤巻は吹き飛ばされていたのだ。

あくまで上条は人間。一撃を放った後は彼女達にとってはゆっくり動くだけの死に体だ。そこを突かせるわけにはいかないのだ。

「いい連携ですね……でもいつまで続きます？」

そう、これは綱渡り。

一瞬でもその連携が崩れた時、上条当麻は即死の一撃を受け、神裂火織は打つ手失う。

しかし、気にすることなく神裂は神速の抜刀術で彼女に斬りかかり、途切れることない連撃で動きを封じる。また同じ戦法だ。

藤巻は神裂の連撃を腕で受け、躲し、時には顔や胴体に直撃を受けながらも次第に二人を追いつめてゆく。

藤巻は上条が攻撃を仕掛ける連撃の切れ間に神裂を攻撃していく。所詮上条は人間。全ての連撃の切れ間に入り攻撃を放つことはできない。

神裂は必死に回避するも生じた隙を何度もつかれば、いつかは避けきれずに受けてしまうことは自明の理だ。

上条もまた同じ。神裂が全ての攻撃から彼を守るわけではない。どうしても攻撃は上条まで届いてしまう。上条は微かに見える藤巻の出す手を見て何とか攻撃を見切り右手で打ち消しているギリギリの状況だ。長引けば二人が不利、あまり時間はかけられない。

「大人しくしてくれたなら、今からでも楽に死ねますよ？降伏しません？」

「誰がするか！死ぬことが救いなんてふざけた幻想オレがブチ殺してやる！」

「別に死ぬことが救いとは思ってないんですけどねえ」

このままでは駄目だ。

あと一手、あと一手が届かない。

そう考え少し離れた場で二人の戦いを観察し隙を探る上条。しかし、二人の動きは人間である上条には速すぎる。その姿を上手く捉えることすら難しい。焦る上条は何かないかと思案し周囲を見回すが、その一手は意外な場所で見つけた。

それは最初から存在していたが今までずっと意識の外にあったものの。最大にして最後のチャンスを見つけた。

「上条さんも男の子ですね。私たちをねっとり視姦してますよ？」

「またふざけたことを！」

怒声と共に神速の抜刀『唯閃』を放つ。しかし、その速さは最初の一撃に劣っていて、神速とは呼べるものではなかった。続く連撃も力の抜けたものばかり、彼女の限界はもうすぐだ。連撃の隙などつ必要はない。

「ふざけてるのはあなたでは？」

神裂の斬撃をただ詰まらなそうに弾き藤巻は迫る。弾く動きは飛びまわる蠅を払うように、その言葉は落胆の色を隠さずに、こんな相手ではこれ以上は時間の無駄。ただ終わらせるそれだけの攻撃。

「藤巻はその距離をゆっくりと詰めていく。」

実際には常人では捉えることも難しい速度であるが、今までの動きより明らかに遅いそれは捉えることは難しくなかった。

神裂は目の前の状況をただ見届けるだけだ。

動こうにも手が、足が動かない。肉体的、精神的限界はもう超えていたのだ。

「神裂ッ！！」

「ッ！？」

上条の声で神裂は我を取り戻す。

足に力が入る。神裂は地面を蹴り前へ飛ぶ。

不意の跳躍に藤巻は反応できず、神裂を横へとすり抜けさせてしまった。

神裂はすり抜け様藤巻の顔面に拳を叩きつけた。

跳躍の勢いが上乗せされた拳を受けた藤巻は十メートルほど飛ばされながらも無傷。のろのろと起き上がり溜息を零す。

「はー……甘く見ました。すみません、確かに少々ふざけ過ぎていたみたいです」

神裂は彼女の言葉は気にせず、視線だけで彼を見る。

上条の顔には諦観の色はない。まだ勝負を捨てていないのだ。

彼はまだ挑もうとしているのに私はこれでいいのか？

これで全力を尽くしたのか？

いや、まだ身体は動く。

動かなくても動いて見せる。

諦めるには早すぎる。

彼女の目に光が戻る。

「神裂いけるか？」

「無論です」

「よし。じゃあこれで終わりにするぞ」

神裂は無言で頷き刀を構えた。

上条は腰を落とし拳を握りしめる。

「最後の攻撃ですか？諦めないんですね」

「当たり前だ！」

「当たり前です！」

それを合図に二人は駆け出す。

上条より近くにいた神裂は先に藤巻とぶつかる。

「ハアッ！！」

「ぐうつ」

神裂は神速の抜刀術『唯閃』を放つ。その勢いは復活し両腕で受けた藤巻は数歩後退することになる。勢いは止まらず二撃三撃と続けてゆく。しかし、藤巻も押されるだけではない。神裂の斬撃を捌きつつ腕を突き出し斬撃を放ち応戦する。

神裂の勢いは止まらない。斬撃を受けながらも攻撃の手は緩めず攻め立てる。

「面倒ですね」

藤巻は激しい斬撃を無視して神裂へ突進していった。右手を突き出し神裂を捉える。しかし、神裂は腕を逃れ彼女の懐へ飛び込む。

「貴方は執拗に首を狙う。来る場所が分かっていたら避けるのは容易い……！」

「……う」

神裂は藤巻の腕を避け脇腹に蹴りを放ち体制を崩す。そして、駄目押しとばかりに追撃する。

「七閃……！」

極細のワイヤーが藤巻を縛り上げその動きを封じる。強固なワイヤーは藤巻にとっては蜘蛛の糸同然であるが、動きを遅らせるのに十分だ。

彼女はワイヤーを引きちぎり、急いで体勢を立て直す。

立て直した藤巻の眼前では上条が拳を振り上げている。ギリギリだがまだ間に合う、これなら避けられる、そう彼女は確信する。

しかし、彼女は見落としていた。この場にはもう一人の敵がいたことを。

突如視界が光に包まれた。

なんの攻撃力も持たないただの光、その正体は土御門の放った魔術。

彼女はほんの一瞬上条当麻を見失う。しかし、その一瞬は致命的だった。

上条の拳は怯むことなく彼女に向かっていく。怯まず拳を放てたのは、病室の変化に気づき土御門が何かを起こすと察したからだ。もう二度とこの機は訪れない。絶対に外せない一撃に上条当麻は渾身の力を込めた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお！！」
「ッウ！？」

渾身の一撃は藤巻の横っ面を殴り飛ばし彼女を二度三度地面をバ
ウンドさせた。

ドゴン！！と。

身体を叩きつける音と共に藤巻は中庭の木に衝突し動きを止めた。

9話 事後報告

病室でそれを眺めた土御門は口から血を吐きながらもその口元には笑みを浮かべる。

鞘を杖にして立つ神裂は息を吐くと肩の力を抜きその場に座り込む。

上条も握りしめた拳を緩め、大きく息を吐きその場で大の字に寝そべる。

「はぁ……はぁ……もう無理だ。足に力はいらねえ……」

「まったくです……ですがこれで終わりです」

地に伏し、動かない彼女を見て安堵する。

彼らは強敵に勝利し大切な友の魂を守り抜いたのだ。

「はぁー……にしてもお前、こんな相手イギリスまでどうやって連れてく気だったんだよ？」

「連れて行くのは簡単だったんです。貴方に触れている限りは彼女は普通の少女なのです。魔術や薬を用いて意識を奪い、その間にイギリスまで護送する予定だったのです」

「それじゃあオレがまた藤巻のヤツを押されるのか。上条さんはくたくたなんですが、はぁ……でもまあ、もうひと頑張りするか」

上条は疲労困憊の身体に何とか起きようと力を込める。神裂もそれに合わせ鞘を杖にし歩き出そうと試みる。

上条達は体温が指先から低下し、芯まで冷えるのを感じる。

突然、数え切れないほどの死者が空間に溢れだし、上条達の肌に触れ、掴み、彼女の呪縛から這い上がり、逃れ出ようともがいてい

た。

上条達は亡者達に圧倒され動きを止めた。

彼らは全て藤巻が取り込んで来た者達だ。上条達は一瞬でそれを理解するが、もう一つの単純な事実気づくのに数瞬の時間を要した。

まだ終わっていない。

「形成」

思考の大半を停止させていた彼らの耳に声が響く。

未だ膝を突いた状態の上条の視線が声の主に自然と向かい固定される。

地面を転がり取れたのだろうか首に巻かれたマフラーは取れ、その下の斬痕が露わになった藤巻はゆっくりと立ち上がっていた。

藤巻はあの一瞬確かに上条を見失い彼の拳を受けていた。

ではなぜ立ち上がれるのか。

あの時の上条の身体は超人との戦闘で疲弊しきり、身体のバランスも崩れ気味で力を十全に拳に載せることができていなかった。しかし、それは些細もので路地裏での素人同士の殴り合いではそれでもう終わっていたほどの威力はあった。

運が悪かったのは、相手が藤巻だったこと。

自ら積極的に人を襲わない彼女だが、この力を手に入れたばかりの頃は殺人衝動が抑えられず何人も人を殺してきた。そのため彼女を討とうと多くの者が命を狙ってきた。彼女は戦いの中に身を置きいくつもの死線を越えて来たのだ。

聖遺物で超人の域にいる彼女でも、その頃は今ほどの強度も腕力もなく普通の銃弾でも傷を負う程度だった。その上戦いに関しては素人同然で、攻撃を見破られ反撃されることも何度もあった。聖遺

物の恩恵がなければとつくに彼女は死んでいた。しかし、死ななかつたために得た経験は彼女に戦いの技術と痛みに対する耐性を与え、油断がない限りは並みの人間程度の状態でもそう易々と意識を落としたりはしない。

上条の右手を警戒していた彼女は、聖遺物の強固な防御力を抜きにしても体勢の崩れた素人のパンチの衝撃に耐えることができた。

圧倒される上条達の思考が働き始める。

何をしようとしているかは分からないが、これ以上藤巻に『何か』をさせてはならない。しかし、分かっているてももう体が動かないのだ。

打てる手はすべて打ち、持てる力はすべて出した。もはや何もない彼らは目の前の現状をただ見ることしかできない。

何とか動こうとする彼らなど気にせず彼女は言葉を口にする。

「罪人よ

首を差し出せ」

空間を満たした圧迫感が彼女の手集中し形を成す。

形は刀。それは神裂火織の七天七刀のような2メートル以上の長太刀でも、華美な装飾などが施された刀でもない、普通の刀。

先ほど空間を満たした圧迫感が形を成したとは思えないほど凡庸な外見。しかし、上条達はそんなものなど気にしていない。

あの亡者達はどこに行った。

彼女が言葉を発した途端、自分達に纏わりついていた亡者達は掻き消され、静寂が辺りを包み込む。胸の内側、魂を握られているような圧迫感はなくなつたが、その静けさは味気なく、自分達以外何も無いような不気味な静けさ。

「それにしてもあなた達は素晴らしいです」

藤巻はゆつくりと歩き出す。

刀を手にしていても今までの戦闘中感じた圧迫感や不気味さは感じられず、そこには殺気^{エモ}すらない。

「聖遺物を持たずでここまで応戦するなんてなかなかできませんよ？」

それはとても嬉しそうな笑顔だった。

今までの表面を取り繕ったような笑顔ではなく、まるで誕生日のプレゼントを貰い喜ぶ子どものような取り繕うことのない無邪気な笑顔。

その笑顔と賞賛とは裏腹に神裂の前に立つと道端に転がる石ころのように、神裂の側頭部を蹴り飛ばす。

「特に上条さんは特殊な力を持ち、聖人と魔術師の援護を受けていたとはいえ、普通の学生が私に立ち向かい殴り飛ばそうなんてまず思わないし、できません」

蹴り飛ばした神裂などもはや気にも留めず、藤巻は既に三階の病室まで移動していた。

魔術を放ち血を吐く土御門にも神裂同様蹴りを放つ。

「こんな嬉しい誤算はいつ以来でしょうか」

気付いた時には藤巻は上条の目の前で笑っていた。

「合格です。あなたならどんな理不尽にも耐えられそうだ」

藤巻は柄に手を掛け鞘からその刀身抜き上段に構える。

刃を見た瞬間、鉄の冷たさが空気を伝い上条の首筋を撫で上げた。見た目は地味な刀だが、その刀身は見るものが見れば唸るほどの業物。

「さあ、もっと足掻いてみせてくださいよ」

神裂と土御門は倒されもう残りは上条だけ。

藤巻に有効な右手を持つ彼だが、当たらなければ意味がない。

（だったら、当てる方法を考える！）

諦めるには早すぎる。まだ何かある。

どんなに強くても必ず弱点があるハズだ。

もう一度拳が当たれば今度こそ藤巻は倒れるはずだ。

それでダメでも何度も立ち向かえ。

ここで倒れれば妹達は誰が守るんだ。

「ああ、足搔いてやる。 teme が妹達を狙う限りオレは何度でも足搔いてやる！」

「はい、頑張ってください。そうしないと大切な人達は皆私に取られちゃいますよ」

「あああああああああああああああああああああ
ああ！」

藤巻は刀を振り下ろし目にも留まらぬ速さで上条へと迫って行く。肺の空気を全て吐き出す勢いで叫び、上条は疲労で動かない身体を無理に動かし藤巻に全力で突っ込んで行く。

ビシャ！！と血が噴き出す。

上条の右腕が肩口からなんの躊躇いもなしに切断された。血は勢

いよく飛び上条の足元に血だまりができる。上条はふらつき地面に倒れる。

「さあ、どういう力かは知りませんが、あなたの頼みの綱は今断ちました。次はどうします？」

上条は血だまりに倒れ肩から血を流すだけで何も言わない。

問いかけた藤巻は数十秒、藤巻は何もせずただ上条を見下ろす。

最初は期待に満ちた目で見ていたが、時間が経つにつれその目は期待から落胆の色へと変わっていった。

絶望的状况で藤巻に啖呵を切った上条はピクリとも動く気配が感じられない。

彼に対して失望し始めていた藤巻はまたしても彼の行動に心を掻き立てられた。

「……ほんと、どこまで驚かせてくれるんですか」

切断された上条の肩。そこに何か得体の知れない莫大な力の渦が圧縮されていくのを感じた。

肌にはビリビリと痛いほどの錯覚が伝わり、間近で花火が打ち上げられたような衝撃が腹の底に響く。

そんな脅威に対峙しても藤巻は笑っていた。この状況で驚嘆や恐怖などではなく歓喜する藤巻は、誰が見ても異常でしかなかった。

上条は未だ地に伏したまま意識を取り戻さない。

謎の力を振るった彼本人は自身が何をしたのかも、この夜何が起きたかも知ることはない。

気付いた時、上条は病院のベッドの上にいた。

外はすでに太陽が登り、横には椅子に腰かけ心配そうに上条の顔を覗き込むインデックスがいた。

目覚めた上条を見てインデックスはボロ泣きし、その後、またこんなに傷だらけになったことに腹を立ていつものごとくスタボロに噛みまわった。

様子を見に来たカエル顔の医者はまたかという顔をしどうしてこうなったかを説明してくれた。

話によれば、昨日の明け方当直の看護師が中庭の異変に気付き上条達を発見したらしく、上条はそれから丸一日以上寝ていたようだ。全員切り傷やら打撲やら傷を負っていたものの命に別状はない。土御門と神裂の二人は処置を施され他の病室に在るとのことだ。切断されたハズの上条の右腕も以前錬金術師に切断された時と同様に、たった一日でくっつけられていた。

説明を受けたあと、一緒にいた少女はどこだと聞かれたがそんなもの上条自身が聞きたいくらいだった。

そもそもなぜ自分達は生きているのか。

藤巻を倒したことで自分達は助かった、なんてことはあり得ない。上条が覚えている限り自分達はあの時殺されているはずなのだ。なのになぜ生きている？

それに妹達、あいつらの魂は？

状況から考えれば無事なはずがない。妹達はすでに藤巻に取り込まれたに違いない。

（ツチクシヨウ……オレは……あいつらを………ごめん、ごめんな……）

シートを握りしめ奥歯を噛みしめる上条は妹達を守れなかった自分を恨み、守れなかった彼女達に涙を流し何度も謝る。

傷の一番深かった上条は2日後には退院した。

他の二人も上条より早く退院していた。神裂は聖人で、土御門は低レベルとはいえ肉体再生オートリバースを有している。回復の早い二人は全開とはいえなくても早々に病院を出て行った。

昨日から茫然としている上条はふらふらと街を歩く。

病院から出て早々土御門からメールが届いたのだ。内容はこの前と同じファミレスに来いとのこととどうやらそこで事後報告を行うらしい。

指定された時間より10分以上遅れてファミレスに着くとそこには土御門と神裂がいた。が二人はなぜか外において店員と言い争いをしていた。

「……………何してんだ」

覇気のない声で上条は聞くと、土御門は正反対にいつもの調子で返してきた。

「よーカミヤン！ 予想通り腐ってるにゃー、いや今な神裂が凶器ぶら下げてるもんだから入店拒否されちまってにゃー」

「…………お前、なんでそんな風にしてられるんだ」

上条は妹達が藤巻に飲み込まれたのに飄々としている土御門に怒り、拳に力が入る。

土御門は気にせず軽い調子で続ける。

「なんでって、オレ達は取り合えず生きてるし妹達も無事だしにゃー」

「お前良くそんなっ……………は？え？」

「だから妹達の魂は今もこの都市を漂ってるぜよ」

「……まじか？」

「大マジだつぜーい」

「おい！ それどういうことだよ！？」

「それより今は入店ぜよ。いい加減警備員呼ばれそうだしにゃー」

アンチスキル

土御門の視線の先では、片手に刀の神裂と店長らしきおじさんがケータイ片手に言い争いを続けている。

ホントにそろそろやばそうだ。そう察した上条は急いで二人の間に割って入った。その顔に先ほどまでの影はない。

5分後。この刀はレプリカだとか、奇抜な格好はコスプレだとか、上条があれやこれやと言いつつ並べ立て、土御門は怒りに震える神裂をなだめるわけで、色々大変だったが何とか店員を納得させ入店することができた。

「それじゃ報告を始めるかにゃー。まあ、まずはカミちゃんが心配していた妹達から、さっきも言ったように妹達の魂は今もこの都市を漂ってる。これはこれで成仏できてないとか違った意味で不味いが、取り合えずは藤巻に取り込まれずにすんでいる」

「なんで、妹達は無事なんだ？」

炎天下の説得で疲れ果てる上条はげんなりしながら聞く。

「そいつについては不明にゃー。単に気まぐれなのかもしれないし、何か裏があるかもしれない、何にしても理由は一切不明ぜよ」

「それに彼女、藤巻ハル子はなぜ私達を生かしたのかも分かりません」

自分の格好をコスプレと言われご機嫌斜めの神裂も上条が抱いて

いた疑問を口にした。

「それについても本人に聞いてみないことには分からないぜよ。ま、分からないことは分からないわけだし、分かることから確認しているぜい。」

今朝、藤巻についてイギリス清教から暫定ではあるが調査報告があった。再度調べ直しても藤巻はこの魔術結社・組織にも属していない流れ者だった。今報告が挙がっている時点で飢餓・紛争地域でその姿が確認されていたらしい」

「紛争地帯ってことは戦ってたんだろ。あんな強いヤツが何で今まで注目されなかったんだよ？」

「特にこれといった事件を起こしていなかったんだよ」
「事件がない？」

あんな物騒なヤツが今まで何もしてこなかったことが信じられず上条は聞き返した。

「今調査できた時点だが、ヤツ自身が積極的に戦闘に参加していたっていう報告は挙がっていない。ただ紛争地帯でヤツのような人物を目撃した、もしくは支援団体の一人として同じキャンプ地で生活をしていた、なんてことばかりだ。今回の学園都市侵入がなければこれからもその存在を知られることはなかっただろうな」

「じゃああいつは今回みたいにならば周りを漂う魂を集めて回っているだけだったのか？」

「現状の報告を見ただけではそうだな。だがここまでだ。これまでノーマークだっただけに藤巻の調査は難航しているらしい。それほど多くの魂を集めて何をしようとしているのか、そもそもいつから活動していたのか、カール・クラフトとの繋がり、そんなもろもろの謎が山積しているにやー」

土御門はお手上げだと言い、ぐでーと背もたれにもたれかかる。
上条は報告を聞き目を細める。

謎が多くこれから何をするか分からない相手。報告では好戦的ではないにしても藤巻の狙いは妹達だ。今回妹達は無事だったが、次に妹達を狙われたら対抗できず取り込まれてしまう。未だ脅威は去っていない。

「今後イギリス清教はどうすると？」

沈黙の中神裂は土御門に聞いた。

土御門はそのままの体勢で答える。

「なにもない」

「は？」

予想外の返答に気の抜けた声を出す神裂と上条。

「ま、そうだな。調査は続けられるようだがヤツに関する対応はなしだ。普通拘束ないし抹殺の命令が出るもんだが、命令は何もなしだ」

「あからさまに裏がありますね」

「だろうちにゃー。何にしてもこのメンバーでの任務は終わりですたーい」

妹達の魂は守れたが、なぜ取り込まれなかったかは分からない。
自分達は助かったが、なぜ助かったのかは分からない。

なぜかイギリス清教はこの件から手を引き、その理由も分からない。
い。

報告は一通り終わったが不明な点多すぎる。

釈然としな終わりに皆腑に落ちないという顔をしていた。

「すみませーんお待たせしました」

そんなもやもやした空気など意にも介さず、明るくはきはきとした声で上条達のテーブルへ駆け寄る人物。

空気を読まないその人物を見る上条の顔は引きつっている。

隣に座っていた神裂も予想外の状況に目を丸くしていた。

駆け寄って来た人物は上条と同じ年くらいの少女だ。丈の短いノースリーブの白いワンピースに下は紺のレギンスという普通の装いなのだが彼女は周りから浮いていた。それはまだ暑いというのに首にマフラーを巻いているからではなく彼女の容姿。

長い黒髪と黒い瞳が日本人としての白い肌を際立たせ、整った顔と艶のある黒髪は清楚な雰囲気を感じさせ大和撫子という言葉を連想させた。着物などを着たらさぞ絵になることだろう。

注目の的、つい先日死闘を繰り広げた藤巻ハル子はそんな視線など気にせず笑顔で土御門の隣に座った。

9話 事後報告（後書き）

最近忙しいのでまた更新が遅くなるかもしれません。

10話 彼女のこれから（前書き）

相変わらずの駄文ですが、よろしければ読んでください。

10話 彼女のこれから

「すみませーん。えーと……このなんか無駄に大きいパフェください。土御門さん今日はご馳走さまです」

「え！？ オ、オレ奢るなんて言っただ覚えにやー！」

「いやですね、四半世紀も生きてないのにもう呆けたんですか？ そっちがご馳走してくれるからって来たんじゃないですか。パフェの一つくらいご馳走してくださいよ」

「いや、でもそれ7000円って高すぎだし！ そもそもそんなの食べ切れないぜい！」

藤巻のオーダーは約2、3キロはあるだろう超特大パフェ。男である上条や土御門でも持て余すほどの怪物だ。

「大丈夫。完食すればタダです」

「完食すればな！ というか別のものを頼んでくれ」

「土御門さんがご馳走するからって来たのに……分かりました。私はこれで失礼します」

「分かったぜよ！……はあ、奢るから話を聞かせろ」

帰ろうとする藤巻を土御門はこの特大パフェを奢るということで彼女を引きとめる。一体上条の寝ている間に何が起きたのか、そもそも彼の隣の神裂も事態について行けず啞然としている。

「おい土御門！ なんで藤巻がここにいるんだよ！」

「あれ？ 来るって言ってなかったかにやー」

「言ってるねーよ！」

明らかに事情を知っている土御門に再起動したての上条は勢いよ

く問い詰め、土御門はわざとらしくそんなことを言って受け流した。

「土御門、事と次第によっては……」

「ちょい待ちねーちゃん、刀に手を掛けるのは止めてほしいにやー。
今からちゃんと説明しますたい」

土御門は神裂を宥めるとサングラスを持ち上げ表情を引き締める。

「一昨日、カミヤんが寝ている間にオレのところ藤巻のヤツが来たんだ。一応神裂のところにも行ったみたいだが、たまたま起きていたのがオレだったみたいでな。まあ、それで藤巻は話があるからつて来たんだが、その話つてのが最大主教との会談の要求だ。断つても無理矢理ケータイ奪われて結果は変わらんし、了承したにやー」
「……それで、最大主教とは何を？」

「それが、どーにも最大主教も話があった、というか面識があったみたいでな。こっちが電話しなくても、藤巻を搜索し発見した次第話をするつもりだったらしい。話はトントン拍子で進んでいったぜよ。それで」

「お待たせしましたー。キングパフェです」

「あ、それ私です」

本題に入ろうとした矢先、ウェイトレスが藤巻の注文したパフェを持って割って入ってきた。

「えーでは、ルールを説明しますね。制限時間は30分、時間内に完食できましたら料金は無料になります。また、途中挑戦者以外がパフェを食べた場合その時点で失格になり、料金の7000円をお支払いいただきます。説明は以上です。準備はよろしいですか？」

「はい、いつでも」

「では……よい、スタート！」

戦いの火蓋は切られた。

少女は単身、数々の挑戦者を屠ってきた怪物へと立ち向かう。

「んっん……」

土御門は咳払いを一つして崩れた空気を立て直した。

「話の結論を先に言えば、藤巻ハル子はイギリス清教の所属になった」

「それはどういうことですか！」

バンツ！ と机を叩き神裂は土御門と藤巻を睨みつけた。

つい先日殺し合いをしたばかりの相手を理由も分らず招き入れたのでは、納得いかないのは当然だ。

「最大主教は電話で『イギリス清教に所属する代わりに藤巻の討伐を免除する』と取引を持ちかけたが、藤巻は二つ返事で了承したぜよ」

現場に立ち会っていた土御門もあまりに軽い調子の会話だったため、そんな重大な内容だとは、藤巻の口から聞くまで全く察することができなかった。信じられず、先ほどまで彼女と会話をしていた自身の上司に確認を取ってもその事実揺るがなかった。

藤巻はリスのように口一杯に含んだパフェを呑みこみ話に加わる。

「ん、んぐ……ま、形だけの取引でしたし、久しぶりにローラにも会ってみたかったのだ。あ、あと上条さんにも興味がわきまして、所属すればそれなりに情報も入ってくるらしいので引き受けましたね」

「オレに、興味？」

「むぐ、んぐ、んぐ……ええ、先日も言っただでしょ『合格です』と、一介の高校生が私に挑みあそこまで戦ったんですから興味もわくというものです。あの夜は少し欲求不満でしたが」

そう言つと藤巻はまたパフェを一口、二口と口の中へと詰めていく。

「それでまー同じ組織に入ったことだし、今の内にお互いのことを知って親睦深めておこうつてことで、一昨日ここに来るよう頼んでおいたつてわけですたい」

「んぐ、むぐ、聞いた通り、はむ、んん、土御門さんが養ってくれと言うので、あと一月ほど日本に滞在することにしたんですよ」

「待て！ 奢るのはここだけぜよ！」

「そんなわけです。何を聞きたいんです？」

「では、なぜ私たちを殺さなかったのですか？」

藤巻の横では土御門が何かを言っているが、藤巻は都合の悪いことは聞き流したいらしくそそくさと話を進め、神裂は二人の茶番に付き合うのが面倒になり土御門を無視して質問を始めた。

彼女達が話を進める横では、大食いシスターの苦勞を知る上条が、今月の死活問題に直面している土御門に同情の眼差しを向けていた。

「むぐ、んぐ……さっきも言っただよに興味を持ったからですよ。

そもそもそっちが敵意を向けなきゃ私も何かする気もありませんでしたし、はむ、んぐ……あー、あと、この魂たちはあなた達が頑張っで楽しませてくれましたし、今後に期待して手は出さないことにしましたので」

それは裏を返せば、期待を裏切るようであれば今度こそ取り込む

ということである。

「興味を持ったからってのは分かったよ。じゃあ、お前はオレに何を期待してるんだ？　そもそも何で魂なんか集めてる？」

「んー、私の目的に関しては前も、ん……言っても分からないと言いましたが、まあいいです。信じる信じないはそちらに任せます」

そう言うパフェを一掬いし口に含む。カップ（というか透明な大バケツのような容器）のパフェを既に半分ほど食しているのに、未だに藤巻はそれを美味しそうに食べている。戦いでもそうだが、こんなどうでもいいところまで化け物染みている。

「私の目的を話す前に、そもそもあなた達は聖遺物についてどの程度知っていますか？」

その問いに土御門は聖遺物に関して自分達の知る知識を話した。人の想念を吸って意思を持った物であること。

それ単体では力を発揮させることはできず、使用するにはある特殊な術式が必要だということ。

使用者は倒した者の魂を取り込み自分のものとして行使でき、その上魔術的・物理的な攻撃を受けない肉体に変生すること。

「つまりほとんど知識がないわけですね」

よくそれで挑んできたものだと感嘆と呆れを含ませて藤巻はそう言った。

「はあ、それでは基本的なことからですね。

はむ、もぐ、ん……聖遺物は人の想念を持って意思を持った器物なんです、その吸収した想念は別に名前の通り聖なるもの、つま

り純粋な信仰心でなければならない、というわけではありません。餌になるものなんて信仰心でも怨念でも、それが強い想いであればなんでもいいんですよ」

実際、藤巻の持つ聖遺物は純粋な信仰心ではなく、多くの者の血を吸って成った物である。

「信仰心、ということは霊装の中にも……」

「ええ、もしかすると気付かないだけで、霊装として使用してる物の中にも紛れてるかもしれませんね」

勿論そんなものは形や役割を真似たような霊装ではなく、人々の信仰の対象として認知されるポピュラーなもの、元々高い力を秘める高位の霊装に限られてくる。

「ん、もぐ、ん、土御門さんはそれ単体では力が発揮できないって言ってましたが、んぐ、ん、呪いや怨念を吸っているものですから聖遺物は存在するだけで災厄を周りに振りまきます。

例えば、雷なんて災害を上条さんならどう回避しますか？ 個人的なことじゃなくて、組織的なことです」
「は？」

いきなり雷の話振られ上条は抜けた返事をする。

「えっと……避雷針を立てる？」

「そう、つまりそう言うことです。災害にも色々ありますよね。自然のものだけじゃなく超自然的なものもまで」

ここで土御門と神裂も得心したといった顔をする。

「つまりは人災……それも悪意や過失によって起きる魔的、呪的、霊的な災害。それを意図的に操り力として行使できるとしたら、どうです？」

「そんなの……」

「できないこともない。カミヤん、京都や江戸なんかで聞いたことないかにやー。外からの厄が入り込まないよう特殊な区画配置を施したって街の話を」

「あ、ああ、何となくそれっぽいことは聞いたことがある……気がする」

問いに曖昧に答える上条に土御門は説明を続ける。

「だが、その程度で災害を完全に防ぐことはできない。そこで登場するのが避雷針ぜよ。」

不幸を特定の場所が引き受けることで、街全体への影響を小さくする。言ってしまうえば生贄ですたい。例えば、霊道の通る街の玄関口に憑かれ易い家系の人間を住まわせる。そうすることで住民は自覚無自覚関係なく、その身に呪いを負うことになる」

「そうすることで大勢の人々が幸せになり、誰かが貧乏くじを引くことになる、ですか……」

土御門に続けた神裂は忌々しげにそう言った。

そして、上条はここであることに気づく。

「なあ、その話が本当なら……オレが不幸なのもその霊道が関係」
「してないにやー。風水の専門家のオレが見て言うんだ、それは確かぜよ。カミヤんの不幸は持ち前のもんですたい」

引越せば自分の不幸も少しはどうにかなると、微かでも期待していた上条はそれを聞いて肩を落とす。

「もぐ、んぐ……その災厄を制御し力とする術式がエイヴィヒカイト。私にもこういう仕組みでどういった目的で作ったかは分かりませんが……そういうのは作った本人に聞いてください」

藤巻は相変わらず笑顔で受け答えをしてはいるが、最後の方はどこか素っ気なく言っていた。

「……知つての通り、エイヴィヒカイトで聖遺物を行使することにより、使用者は超人に変生します。ん……魔術的・物理的攻撃はもちろん飢えでも、毒でも殺すことはできなくなります」

「しかし、それだけの術式をなんの代償もなしに行使するのは不可能です。つまり、それは……」

「ん、ん……はい、お察しの通りこれは魂を消費して使用する術式です」

どの魔術も生命力を魔力に変えそれを燃料に発動しているが、エイヴィヒカイトはその消費量が他の術式の比ではない。自身の魂だけで聖遺物を使用した場合、2、3回の戦いで、最悪1回の戦闘で魂を使い切ることになるだろう。

だが、聖遺物は魂を取り込むことができ、更にはその魂の質と量に比例してより強大な力を行使できる。

エイヴィヒカイトは、人を殺し続けねばならない代償に相応の力を与えてくれる。悪魔のような術式なのだ。

「つまり……お前が魂を集めていたのは自分が強くなるためだったのか」

上条の左腕に力が籠る。

藤巻を睨みつける上条は右腕が完全に治っていないくても、左腕で

殴りかかりそんな雰囲気だ。

「違いますよ。救うって言うてたじゃないですか」

そんな上条とは対照的に今まで通り笑顔で受け流し、またパフェを一掬いする。

「ん……上条さんは今と同じ状況を以前にも感じたことがあると、感じたことはありませんか？」

「は？ ……デジャヴってヤツか？ オレはないけど……」

雷のことと言い、また藤巻は突拍子のないことを言いだした。

「私はたまに感じます。友達と楽しく笑った時。新しい景色を目にした時。大事な人が死んだ時。未曾有の危機に瀕した時。私はそれをただ前にあつた出来事の追体験であるかのように感じてしまう。初めてのことはずなのに、私は確かにそのことを覚えてるんです」

「前世だ……とかでもいいいたいのかな」

「そうじゃありません。私は今を覚えてるんです」

藤巻はわけのわからないことを言いだした。

デジャヴなんて誰でも感じる。友達とは本当に前に同じ話題を話していただけかもしれない。景色も似たようなのを前に見ただけかもしれない。未曾有の危機も脳が精神を保つため自己防衛で感じさせたものなのかもしれない。そんなデジャヴを感じるから何なんだ。上条は藤巻がいったい何を言いたいのかが分からずただ見つめる。

「この既知は一体何なのか私にはその正体がわかりません。でも、こう思うんです。私は本当に以前に『今』を体験し、現在になってまた『今』を感じているんじゃないかって」

「お前は……何が言いたいんだよ」

話が全く見えてこない上条は藤巻に尋ねるが、藤巻はその反応が分かっていたと言わんばかりに上条に返す。

「言ったでしょ、分からないって。これは私と同じ感覚を覚える人しか理解できません。だから今は、何となくそういうものだ、程度に覚えておいてくれればいいんです」

上条はこれが何か魔術的な内容を指すもので、分からないのは自分だけなのではないかと思ひ、土御門と神裂を見るが二人も同様に理解できていないらしい。

「私の『今』はただの繰り返しであつて、それを追っているだけだとしても私は別にそれはそれでいいとも思ふんです。人生の新しいものがなくなり、ただ詰まらないものに成り下がらうとも。私は何事もなく平和に生きていければいいんですよ」

そう縁側で緑茶を啜る隠居した老人のように藤巻は言つた。

しかし、この『今』を知っている感覚、既知感は藤巻が上条に興味を持った本来の理由でもある。

藤巻はこれまでも何度か自分の予想を超えた大きな力を見て来たが、どれも今後に期待しようと言う程度で、あの謎の力を見せる前までは上条もまたその括りの中での存在でしかなかった。しかし、彼のあの力はその認識を改めさせた。

藤巻はあの力を知っていると感じなかった。

当たり前の話ではある。彼女はこれまでの人生で上条当麻という人物とは一度たりとも会ったこともなければ、あんな力を他に振るう人物とも会ったことはない。

だが可笑しい話、彼女はたとえそれが初めて見たものでも既に知

っているという既知感を時折感じるのだ。どれほど強力な力でも、どれほど絶望的状况でも、どれだけ楽しい時間でも、それは既に知ってしまったているのだ。今まで目にしてきた力は皆どれもそんなものばかりだった。

しかし、上条当麻は違った。

あの力を既知と感ずることがなかった。

もしかするとたまたま感じなかったかもしれない。

彼女も常時既知を感じるわけではない。彼の力に既知を感じなかったのはたまたまそのセンサーが働かなかったただけかもしれないし、本当に知らない『未知』なのかもしれない。

彼女の上条への興味はそんな判断のつかない中庸状態によるもの。『既知』か『未知』かの判断とそれをどう利用できるかという興味と思惑が藤巻の中にはある。

「でも他は？ 生まれてすぐ戦地に立たされる子どもは？ 家族のために戦い死んでいった者は？ そんな修羅道を何度も繰り返す人生に、救いがありますか？」

ここで藤巻がこれまで何度も口にしてきたワードを聞き、上条は藤巻の言う『救い』が何なのかを理解し始める。

「何度も繰り返し地獄を生きるなら、聖遺物の燃料として消えてしまふことが彼らの救いじゃないですか？」

藤巻の『救い《もくてき》』を理解した上条達は啞然としていた。

「お前は……そんなことで、行動してたのか？」

その程度の勘違いとも思える感覚を信じて空想を抱き、その空想の結果出た可哀そうな者を救おうとしていた。

上条達はただただその事実が信じられずにいた。

世界中を回り魂を集め、あれほどの力を振るっていた者がそんなことで動いていたのかと信じられずにいた。

藤巻はそんな上条の問いにも変わらず笑顔で応じ続ける。

「そんなもんなんです。じゃあ他に、あと私について聞きたいことはありますか？ 親睦を深める場なんですからどんどん聞いてくださいよ……………ないみたいです。それじゃあ私はこれで。」

土御門さん今日はご馳走様でした」

藤巻はそう言うと言席を立ち店を出た。

彼女の特大パフェはいつの間になくなり、時間もまだ30分経過していなかった。

後に残された三人はまるで狐につままれたかのように店の出入り口を見つめるだけだった。

10話 彼女のこれから（後書き）

レポートがあるのに、私は何やってんでしょっか……

11話 あの夜を知る者たち（前書き）

短いです。

11話 あ之夜を知る者たち

そのビルには窓もなく、階段もなく、エレベーターも通路もない。
大能力者^{レベル4}の空間移動^{テレポーター}がいなければ出入りもすることもできない、建物としての機能を欠いたビル。

核シェルターを優に超す強度を誇るビルの中の一室。部屋と呼ぶには広大過ぎる空間を照らす照明は一切ないが、それでいて、部屋の四方の壁を覆う無数のモニターやボタンの光が空間を満たし照らしていた。大小数万にも及ぶ機械類からはさらに数十万にも及ぶコードやケーブル類が伸びて、血管のように床を這い、それらは全て空間の中央へと集まっていた。

部屋の中央には直径4メートル、全長10メートルを超す強化ガラスでできたビーカーがあり、その中は赤い液体で満たされている。液体の中で逆さに浮かぶ、男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見える人間は、目の前の少年の報告に耳を傾ける。

「暫定報告で、藤巻ハル子が初めて姿を確認されたのが20年前、世界各地を転々とし魂を回収していたようです。」

実際に肌で感じてみて戦闘中に数百人、最高で数千人程度。しかし、聖人の攻撃でも傷を負わない密度の霊的装甲を纏っていたにも関わらず、感知できたのがその程度ということから、そう言った気配を操る技術にも長けていることが窺えます。

特に形成発動時、相手もこちらに気づいていたためか、形成を発動させたにも関わらず、その隠蔽は発動直後一時的に揺らいだ以外は、さらに強く彼女の實力を隠していました。相手も満身創痍だったこともありその隠蔽は以後揺るがず、それ以上藤巻ハル子の實力を深く知ることはできませんでした」

ただ淡々と報告をするのは、小柄で身体の線が細い金髪碧眼の中

学生くらいの少年。中性的な顔立ちとセミロングの髪と体格、それに声変りもしていないようなよく通る高い声のせいで、どちらかというと少女よりなほどだ。

「藤巻ハル子は右手の力の片鱗を目撃。アレとぶつかれば否が応でも隠蔽は解かなければなりません、それ以上アレの情報漏洩は危険と判断し、完全に力を形成させる前に右手を叩きました。」

その際、藤巻ハル子と接触。ここの魂は既にこちらの物であること、手を出すようであれば衝突も辞さないことを説明し、彼女はそれを了承しました。その後は命令通り彼女には手を出さずその場を離脱。報告は以上です」

ビーカーの中の人間、学園都市統括理事長アレキスター「クロウリーは表情を変えることなく言う。」

「君はなぜ幻想殺しが力を現す前に手を出さなかった」
イマジンプレイカー

「だって僕の任務は隠密だよ！ 極力表に出るのはさげなきや！今回だって一応顔は隠してたけど、あのバカのせいで敵と接触しちゃったしッ！ それにあそこまでならセーフだよッセーフッ！ そんな手を出すなんて最後の最後なんだよッ！」

少年は今までの淡々した口調とは一変し、頬を膨らませ砕けた喋りで抗議する。

「……………」

「大体上条なんかの御守を頼んだのはアレキスターじゃないか！アイツ右手があるからって事件の中に自分から飛び込んで、それに付いてくこつちの苦労も考えろっての！ 知らないだろうけど！！そりゃそれもプランの内だってのは分かっているけどさ、アイツのためにこつちの貴重な時間を裂かなきゃって思うと……………アー——」

「ッ!」

「……………私はたまに君がこの任務に向いていないのではと思う時がある」

「解任!？」

「いいや」

「アレイスターの意地悪!」

「……………」

アレイスターに対し、こんな物言いができるのは世界でも彼くらいだろう。そもそも、アレイスター「クロウリー」という人間にこのように接しようと思う人間自体そうそういない。

魔術の世界ではその道を頂点まで極めたにも拘らず、科学へと進む道を変えた彼は世界中の魔術師を敵に回し、今の地位に就いても表舞台には立たず彼の周りはその権力を狙う者ばかりだ。

そんな稀有な存在をアレイスターは変わらず無表情の冷めた目で見続ける。

「藤巻ハル子についてはこちらでも観察していたが、アレもプランの短縮に役立ちそうだ。以後は幻想殺しの監視と並行し彼女の調査を行うように」

「え……………」

「不服でも?」

不満をありありと表に出す彼に対し、アレイスターは平坦な声で尋ねる。

「だってアイツ……………逃げてる僕を思っクソ睨んでたんだよ。楽しみに取っておいたケーキのイチゴ盗られたーみたいにな、殺意むき出しで思いつき」

「その例えと、世間一般が抱くであろう感情が噛みあっていないの

だが」

「とにかくアイツめっちゃ睨んでたんだって！……僕できるならもう会いたくないよー」

「しかし、現状正面から彼女に対抗できる能力者は君しかいない」

「第一位がいるじゃん」

「アレではまだ駄目だ」

アレイスターは少年の提案など一拍も置かずに切り捨てる。

「……………」

「……………ああー……………はあー……………」

……………」

二人は数秒無言で見つめ合つと、諦めたのか少年が深いため息を吐き手に持っていた帽子を深々と被る。

アレイスターからは帽子で表情が見えないが、少年の顔からは先ほどまでの緩みや感情が一切消えていた。

「『上条当麻監視任務』の継続及び『藤巻ハル子調査任務』了解しました」

タイミングを見計らったかのように空間移動が部屋に現れる。
テレポーター

少年は現れた少女の元へと歩み寄り手を握るとアレイスターに振り返る。

「失礼します」

ただ一言、アレイスターと同じような平坦な声でそう告げると、少年は空間移動と共に部屋から消えた。

12話 赤い夜

切り裂かれた首は呼吸をするたびひゅひゅと壊れた楽器のよう
に音を鳴らす。空気を肺に送るところか痛みという刺激を脳へ送
るばかりで、今にも意識が飛んでしまいそうになる。おまけに多量
の出血のせいで今も意識が朦朧としている。

こんな状態ではもはや助からない。混濁した意識でもそれは十分
に理解できる。ならばより楽に、痛みや苦しみを最小限に死ぬこと
を考え、願い、激痛に抗わず早々に意識を飛ばして楽になるか。

(……………いやだ……………死にたくない)

藤巻は痛みには抗い今にも飛びそうな意識を繋ぎ止める。

死が確定したこの絶望的状况でそんなことをしてもただ苦痛が長
引くだけだろう。それでも死にたくない、生きたいとなぜ思うのか。

愛する者を残しては逝けない。

彼女がいまだ生へ執着する理由などそんなありきたりなものだが、
そんなものでも彼女にとってはこの絶望に瀕しても諦めない理由に
は十分過ぎる大切なことだった。

しかし、そんな彼女の意志とは関係なく死は着実に迫っている。
首からは未だ鮮やかな赤い血が流れているが、その勢いは最初の蛇
口を一杯に捻ったようなものではなく、じわじわと染み出る程度に
弱まりつつある。それに伴い視界も次第にぼやけていき、何とか視
界に捉えた狂人は周りに誇らしげに何かを語っているようだが、そ
の声ももう聞こえてこない。

(こんな最期……………あんまりだよ……………私、何かしたのかな?)

悪いことなどした覚えはない。

毎日一生懸命働いて来た。

戦争に行った父や兄を愛してきた。

母や祖母、妹を大切にしてきた。

なのになぜ。こんな理不尽に殺されなければならないのだ。

理由を探すが納得する答えなんて見つけれない。

（わけもなく殺されて死ぬ……そう言うことなの？）

「然り、わけなどない。君はただ条理に従い今こうして死に瀕している」

突然響いた声、それは不思議と聴力を失った彼女でもハッキリと聞き取ることができた。

彼女はぼやけた視界で何とか声の主を捉えようと目を凝らす。しかし、視力も失いつつある彼女の目はもはや狂人も、気味の悪い置き物も、壁にへばりついた血痕も、すべて闇に同化して光の明暗しか捉えることができない。その声の主もまた闇に溶け込みその姿を見ることができない。

（幻聴？ ……………それとも、死神かな？ ……）

藤巻は死の間際に響いた声をそういうものだと思ったが、

「私は幻聴でもなければ、死神などという大層なものでもない。そう、私など取るに足りない詐欺師の類」

（……詐欺師？）

「ああ、そう詐欺師だ。私はその程度の詰まらん男だよ」

なぜ思考を読めるのか、などという疑問はどうでもよかった。彼女は、この死の間際にただ一つだけ、この詐欺師を名乗る男に聞きたかった。先ほどから抱えている疑問を誰でもいいから答えてほしかった。

（私は……なんで、死ななきゃいけないの？）

男はその問いに優しく、柔らかな声で応じる。

「君はその問いの答えを既に知っている上、私もつい先ほどそれに答えたはずだ」

記憶を探りこの男との会話を思い出ししていく。そして、彼女はあの単語を思い浮かべる。

（……条理……）

「そう条理だ。こうした最期は既に決められたそれに従いながらに過ぎない。不幸だった。ついていない。これはただそれだけのこと」（そんなの……）

「不条理だ。だがしかし、この世界とはそういうものだ。人生におけるあらゆる選択、些細なことから大事なことで、すべては選んでいるのではなく、選ばれているものであり、無限の可能性などというものは幻想であり、人は定められた道の上からは降りられない。富める者は富めるように。貧しきものは餓えるように。善人は善人として、悪人は悪人として。美しき者醜き者、強き者弱き者、幸福な者不幸な者。すべて最初からそうなるように……それ以外の者にはなれぬように、すべてが定められている」

僅か一秒にも満たない、走馬燈のようにゆっくりと進む時間の中の語り。

藤巻はただ男の冗長な語りに耳を傾けていた。

顔も姿も分らない詐欺師を名乗る男は彼女のことなど気にしていない。ただ自分が喋りたいから話すんだと、独り言のように語り続ける。

「だがこの法則、^{ゲット}厄介なことに死ねば逃れられるものでもない。君は死後、まったく同時、刹那のずれもなく同じ母の子宮に宿り、生まれ、君として生きて死ぬ。^{ゲット}繰り返すのだよ。未来永劫、永遠に、私たちは皆運命という牢獄に捕えられた虜囚に他ならない」

この男の語る話はどこまでも突拍子もなく。確たる証拠もないただの戯言。それを一人勝手に嘯き続ける。

男は否定したが、藤巻は男の長々しい語りを死ぬ間際の幻聴ということにした。

（……こんな幻聴を聞きながら死ぬのか……いやだな……話し方も何となく癪に障るし）

「私は幻聴ではないと言ったはずだが。いや、しかし、そうかすまない。君を無視して私ばかり話していたな。では君の興味を引く話をしよう。そうだな、例えば、私が君をこの窮地から救うという話はどうだろうか」

（ ）

幻聴だ、つい先ほどそう決め付けた彼女だったが、放たれた言葉に不覚にも反応していまう。男はそれをくつつくつと含み笑い言葉を続けた。

「私の創造した術で以て君を救おう。ここにはそれを為すための道

具も、奉げるべき贅も、そしてそれに耐えうる魂も、必要なものはすべてある」

(……………)

まだ死にたくない。助かるかもしれないなら、例えそれが幻聴の囁きでも気持ちが悪くしてしまうほど彼女は余裕をなくしていた。

このままこの男を頼ってしまおうか、藤巻にそんな考えが過る。しかし、同時に第六感とも言うべき感覚がこの男に対し警鐘を鳴らしている。本当にこの男の手を借りてもいいのか。実際に助かるかどうかではない。むしろ、幻聴の戯言のくせに『彼を頼れば自分は助かる』などという確信に似た予感を感じるほどだ。感じる不安はもつと別の、何か大きな危険を警戒しろと言っている。

(…………… 本当に、助かるんですか？)

「大丈夫、信じたまえ必ず君を助けよう」

(…………… あなた、名前は？)

「ああ、すまない。まだ名乗っていなかったかな。悪い癖でね、私にとつて名など何の意味も持たないものゆえつい忘れてしまうのだよ。私はカール・クラフト。さあ、今度は君の答えを聞かせてくれ、助けが必要か、否か」

しかし、このままでは自分は死ぬ。ならば、少しでも希望があれば頼るほかないじゃないか。それが例え、言い知れぬ不安を孕んでいる選択であろうとも。

(…………… お願い、します。助けてください)

「重畳。君の願い確かに聞き届けた。必ず君をこの窮地から救い出そう」

これでいい。今感じているこの不安なんて勘違いだ。気にすることはない。藤巻は自身にそう言い聞かせるが一向に不安が拭えない。救いを求めると同時。小さなノイズが響いた。それは次第に大きくなり、男の声を遮り始める。

「君を

術の名はエイヴィヒカイト。超常の

永劫を破壊する

」

男は術が云々と言っているが、声にノイズが交じり何を言っているかも聞きとることはできなくなっていく。

こんな状態の藤巻に語りかけたところでなんの意味もない。しかし、男は意にも介さず一方的に話し続ける。

もはや声を聞くこともできない藤巻の意識は急速に意識が薄れていく。

男は一通り語り終えると、一拍置いて一言藤巻に言葉を掛ける。

「

」

彼が最後なんと言ったのか。藤巻はそれをノイズとしか認識できなかったが、確かに彼が何かを言っていたことは間違いなかった。

『赤』。それが彼女が目覚めて最初に見た色。

豪華で絢爛な部屋で彼女は茫然と床を見つめ佇む。

何も纏わない彼女の全身は赤く、赤く、染められていた。

足元に横たわる男には頭がない。首の切断部は水道管が破裂したように赤が盛大に噴き出している。

彼女の手には切り離されたであろう男の頭。足元のものと繋がっていた場所からはべちゃりべちゃりと赤が垂れ落ちる。

その赤は『血』。

周囲を、足元の死体を、掴んでいる頭を、血に濡れた自分を、目で確認しそれがなんであるかを認識し、その赤が『血』であると、彼女が認識するために数分の時間を要した。

次いでそれが血であると理解すると、彼女の身体は小刻みに震え、呼吸は規則性を失い、心臓の鼓動は早く、全身から汗が噴き出す。彼女は手に持った首を投げ捨て、慌てて後ろへ飛び退く。飛び退いた彼女は足に力が入らず着地に失敗し尻餅についてしまう。

（だれが……こんな……）

そんなもの分かり切っている。

藤巻ハル子、この女があれをやった。

（なんで……？）

カール・クラフト。

あの男と関わり助けを求め、死という運命を無理に捻じ曲げた。その代わりの他人の死。代償として当然だろう。

（……私は、悪くない）

助かりたい。そんな自分のエゴで他人を殺した。
悪くないはずがないだろう？

（そうだ……これは夢……死体も……血も……全部、全部……）

…)

いいや、これは現実。

そうまでして自分の罪から逃れたいのか？

不思議だった。

現実を否定しようとする自分と、冷めた目線で現実を見ている自分がいるのことが。

自分の思いを否定し現実に向き直させるその声は、どこまでも冷たく冷静で、この凄惨な現実を前に一切の揺れを見せていない。

次第に彼女は逃げ道を失い、その感情はジワリジワリと染み出るように外へと溢れ出す。

「あ、ああ……… ああああああああああああああ！！」

絶叫し彼女は駆け出す。

両開きの扉を一切の力加減もなしに押し開き、華美な廊下を全力でかける。

これは夢。だれが何と言おうと夢だ。夢でなければいけないんだ。彼女は何度も自分に言い聞かせるが、肌を感じる寒さが、全力疾走の苦しさ、廊下に転がる死体が、これは現実だと突き付ける。

(だれか……誰かいないの……)

誰でもいい。こんな地獄に一人は嫌だ。生きている人間はいないのか。

彼女は廊下や部屋、屋敷中を必死になって駆けまわり人を探したが、目に飛び込むのは皆彼女の見知った者の死体ばかり。

庭師のおじいちゃん。料理人の橋田さん。彼女と同じ家政婦の花子ちゃん。皆首と胴、四肢がズタズタに切られ、何度も斬り裂かれ

た胴はべちゃりと腸や心臓、肺などの臓器を伸び出させている。沢山の死体の中には損傷も少なく何とか誰のもののか判別のつくものもあつたが、皆苦痛と恐怖に顔を歪めて死んでいた。

息を切らし駆ける彼女の足はいつの間にかある場所に辿り着く。

それは書斎。

ぎっしりと本が詰まった本棚に、主がいつも仕事をしていたであろう机、部屋の中央のテーブルにはあの夜の酒とグラスがそのまま残されていた。それはあの楽しかった語らいと同じ光景。しかし、違いは一つある。それは階段。機械仕掛けで動く本棚の裏に隠されていた地下への階段が、隠されることなくそのままに放置されていた。

彼女は部屋にあつた蠟燭に火を灯し、ゆっくりと地下へと降りて行く。

木製の階段は一段一段降りていくたびギシギシと軋み音を立てる。蠟燭が照らしているのは数歩先まで、その先は深い闇が広がるのみ。しかし、闇しか広がらない空間でも察知できることはあつた。それは血の臭い。地下の狭く密閉された空間のため、その臭いは屋敷中に充満しているものより濃密で全身に纏わりつく。充満する血の臭いは吐き気を催し息をするのも躊躇うほどだ。

辿り着いた地下室も闇に包まれ数歩先までしか見ることができない。

とにかく明かりを。そう思い彼女は部屋から持ってきた蠟燭に火を灯し次々と置いていく。それはまるでパズルのピースをはめ込んでいくかのように、床に広がる赤い血を、飛び散った肉片を、引きずり出された内臓を照らし出し凄惨な現場を映していく。

彼女の手は止まることはなく、次々と惨状を明かしていく。

照らし出されたのは血の海。

狂人たちは皆息絶え、壁を、床を、天井を、その血で汚していた。

とぼとぼと血だまりの上を歩きその中心、礫台の許に立つ。

(……ここで、私は……)

ゆっくりと自分の首に指を這わせる。

指に伝わるのは、何年も前の古傷のようなデコボコとした感触。

(……本当に……)

あの、恐怖は、痛みは、死体は、血は、全部、全部本物で……

(……本当に、私は……)

彼らを皆、全員、全て、この手で一人残らず……

「ふふ……あはは……ははは……」

力なく洩れた笑いが薄暗い地下室に響く。

人を殺した自分を恐怖し、忌み、侮蔑する。しかしその片隅で、死の淵より生還しほっと胸を撫で下ろす自分がいて、それがどうしようもなく醜く許せない。そんな愚かな様を一步も二歩も離れた場所にいる冷めた自分が無感動に見つめていて……

「……人、殺して……頭の中も、こんなにぐちゃぐちゃなのに……私、まだ生きたいんだ……」

人を殺してでも、生きていたい。

(こんな人じゃない……私は鬼だ)

藤巻は庭に穴を掘り、屋敷中の遺体をそこに埋めた。

それは一人で行うには骨の折れる作業で、全てが終わるまで丸一日掛った。

埋葬を終えた彼女は身に付けた簡素な着物を脱ぎ棄て血と泥を洗い流すと、いつも身に着けていた赤茶色の着物に着替え屋敷を後にした。向かう先は彼女の生まれ育った村。それでこの地獄のような現実から日常に戻るために。

そうして彼女は暗い山の中を歩いた。

男が都会の戦火を逃れるために暮らしていた屋敷は、彼女の村から幾つも山を越えた場所にある。村に着くのはいつになるのか、分からないがとにかく歩いた。

遺体を運び、墓穴を掘る時にも感じていたことだが、いくら歩いても疲労がない。いや、正確には疲れはするのだが蓄積する疲労が少なすぎる。元々体力はあったが、山道を休みなく歩いて疲れないほどタフネスではない。

（人を襲った上に、この体力……本当に鬼みたい……）

屋敷を出た二日後の夕方。

彼女は生まれ育った村に到着した。

村の風景には不釣り合いな上等な着物に、優れた容姿。村の者達はずぐに彼女を見つけ一年振りの再開を喜ぶが、彼女の首の傷痕を見た瞬間その顔は一樣に訝しむものへと変わる。これはどうしたかと問われた彼女だが、上手い言い訳が思いつかず黙り込んでしまう。痛々しい首の痕はどう見ても致命傷で、いくら奉公先が金を持っていた、いい医者に診てもらえるような家だったとしても、あれほ

どの傷を治せる医者も術も到底あるとは思えなかった。村人は皆彼女から距離を置いた。しかし、彼女の家族だけは違った。娘が戻ってきたことを純粋に喜び、傷についても深く触れることはなかった。祖母とは以前のように一緒に畑仕事をこなし、以前より体調が良くなった母も優しく語りかけてくれた。5歳になった妹が自分を姉だと覚えているか不安だったが、どうやらちゃんと覚えていたらしいことにも安心した。

家族だけは自分を思ってくれている。そのことに彼女は心から安心した。

彼女は普通でいることに努めた。

この傷で喋りでもしたら周りは更に気味悪がり家族も自分から離れてしまう。彼女はそう思い自分は話せないということにし口を噤み、村人も家族も彼女が喋れないものだと思い込んだ。

彼女は村人に避けられながらも以前のようにもんぺを身につけ畑仕事に従事する日々を送るようにした。大丈夫、時間が経てば周りも家族のように接してくれる。そう思い日々を送った。

彼女が村に来て半月ほど経った頃だろうか。村で行方不明者が出た。

最初は山に入って道に迷ったのかと思い搜索が行われたが、それが連日続きこれは可笑しいと村人も思い始め、真つ先に疑われたのが藤巻ハル子だった。

彼女が来るまでこんな事件は起きていない。疑うのは当然だった。藤巻は捕えられ、倉に閉じ込められた。

そして、それ以降3日間事件は起きず平穏な日々が過ぎた。これにより彼女が犯人であるという疑いは確信に近いものになり、村人は皆彼女を犯人としてしか見なくなっていた。

しかし、藤巻は行方不明について何も分からなかった。訳も分からず捕えられ閉じ込められた。

これではまるであの屋敷と一緒にじゃないか。

(……………一緒?……………また、殺される?……………)

瞬間彼女の視界が赤く染まる。

眠気に誘われるように意識がどんどん遠のいていく。

ふと気づけば手や足の圧迫感がなくなっている。どうやら縄が切れたらしい。

なぜ縄が切れたのか。そんな疑問を浮かべたが、すぐにそんなものどうでもいいと思ひ止め、ゆつくりと眠りに堕ちていった。

その晩見た夢は最悪だった。

村人は皆逃げ惑い、藤巻がそれを追いかけて殺す。

ゆつくりと村を歩く彼女は何も持たず、特に何もしていないはずなのに、彼女が近づいた村人の首が次々と飛んで逝く。後ろから彼女に殴りかかるうとする者もいたが、視線も向けられることなく切り捨てられた。村人に残された道はもはや逃げるのみだ。

その追いかけて刈り取る光景は、どこまでもぼんやりと現実離れしたもので、本当に夢でも見ているのではないかと思うほどだった。

逃げ惑う老人も、子供も、女も、動物も、皆、皆、刈り取っていく。

それがどれだけ親しくて、どれだけ大切に、どれだけ好きなものだったとしても、一切の迷いもなく首が断たれていく。

死に瀕し生きることを諦めなかったのは、愛する者を思ったからだ。その抛り所があったからこそ彼女はあの時生きたいと願ったはずなのに、その抛り所を今まさに彼女自身が壊している。もしこの抛り所がなくなれば彼女は一体どうなるのか。

これは人生で最悪の悪夢だ。

視界に入る者は皆死体ばかり、動いている者は人だろうと動物だ

ろつと皆首を切られ死んでいた。そして、彼女の足はある場所へ、最も暖かなあの場所へと向かっていく。

(……………止まれ)

木戸越しでも分かる怯え潜める息遣い。

(……………止まれ……………止まれ！)

中の三人は予想通り怯えていて、ゆつくりと彼女らの元へと近づいていく。

(止まって！ 目を覚まして！ 覚まさないッ！)

首が一つ飛ぶ。それは祖母の首。

(……………っ)

母は妹を抱え外へと逃れる。

彼女は感慨もなく祖母に背を向けゆつくりと二人を追う。

(……………止まってよ……………お願い……………)

母は自分を追う娘に必死に何かを語りかけるが、彼女は変わらずゆつくりと歩き距離を詰め、間合いに入った母の首が飛ぶ。

母の身体は力を失い倒れ、抱かれていた妹は転げ落ちる。

(もう止めて……………お願い……………止まって……………こんな夢早く覚めてよ)

村人が殺される異常事態に母の胸の内で怯え涙を流していたのだ

ろう。目は赤く、頬には涙の跡が残っている。少女は涙で潤んだ大きな瞳で目の前の姉を見つめている。

藤巻は妹に一步また一步と距離を詰めていき、間合いの一步手前にまで迫っていく。

しかしこれは何だ。今まさに妹を手にかかけようとしているこの時ですら、冷静に事態を見ている自分がいる。お前一体何なんだ。

藤巻は冷静な自分に、勝手に動く自分に、何もできない自分に憤る。しかし事態は全く変わらず、彼女は今まさに最後の一步を踏みこみ、妹の首を斬り落とそうとしている。

（ ツ ）

間合いに入る。

瞬間。妹の首目がけ、不可視の斬撃が高速で空を切り迫る。

あと数瞬で彼女の大切にしてきた全てがなくなる。

最後の抛り所を、生きる希望を消し去ろうとしている。

「 ! ? 」

不可視の刃は皮を、肉を、骨をなんの抵抗もなく斬り裂き、妹の首は呆気なく斬り落とされた。

この村で動く者は彼女以外いなくなった。

彼女の視界と意識は正常に戻り、身体も自由に動かせられる。

彼女は茫然と妹を見つめる。しかし、それは悲しんでいるわけではない。

思い出したのだ。カール・クラフトが最後に言った言葉を。

「……………愛する者を殺す……………」

あの男が言った通り藤巻は愛する者を殺した。

それは自分の意志とは関係なく、まるで誰かに身体を操られたかのように。

「……………カール・クラフト」

これが本当の代償だと、あの男はそう言いたいのか？

「……………あなたは確かに願いを叶えてくれました」

しかし、こうなると分かっていたら……………

静かに沸々と湧き上がる怒り。

噛みしめた唇から、握りしめた手から血が流れる。

「でも、私は……………愛する人を殺してでも生きたいわけじゃない」

彼女は月も星もない空の下独白する。

「こんな呪い……………欲しくなかった」

この呪いをかけた男は憎い。しかしそれよりも、嫌な予感を感じていたにも拘らず、あの男の誘いに惑わされた浅はかで、愚かな自分自身が許せない。

弱々しく零れた声は冷たい夜の空気を伝い深い闇へと溶けた。

13話 神裂（前書き）

相変わらずの駄文です。

13話 神裂

1945年10月7日。

終戦を迎えた日本だったが戦火の跡は大きく残り、敗戦による不透明な未来に人々は不安を抱く日々を送っていた。

あの夜から半年以上が経ち藤巻は各地を転々とし現在は九州の対馬に辿り着いていた。

対馬は全体的に山がちの険しい島で、藤巻の立つ小石が転がる狭い浜辺も海の反対側は急な山に囲まれていた。

藤巻の纏うもんぺは元々ボロで継ぎはぎだらけだったがこの長い旅で更に傷み至る所が破れていた。しかし、纏う衣服がみすばらしくろつと彼女の美しさが霞むようなことはない。晴れ渡った空の下普段頼破りしていたボロ布を取り去り海風に髪をなびかせ、憂いを帯びた瞳でジツと海の向こうを見つめ佇む姿はどこか儚げな美しさを漂わせていた。

藤巻は海風を肌に受けながらそっと目を閉じる。

(……本当、何やってるんだろ)

あの日、愛する者を殺し生きることの意味をなくした藤巻は自害を試みた。

家にあつた包丁を首に押し当て、刃が白い肌を裂き赤い血が首を伝う。彼女は固く瞳を閉じ包丁を握る手に力を込める。刃が頸動脈を引き裂き鮮血を噴き出させ彼女は死ぬ。そのはずだった。

カシャン、という金属がぶつかる音を聞き藤巻は瞳を開ける。包丁は彼女の頸動脈を断たずに手を離れ地面に転がっていた。次いで彼女はガタガタと自分の身体が震えていることに気づき足から力な抜け座り込んでしまった。

座り込む藤巻は自分がどうしたのか理解できずにいた。いや、本

当は分かっていたが認めるわけにはいかなかったのだ。村人を、友人を、家族を殺した自分が、今さら自分の命を惜しいと思ってしまう。死ぬことを恐怖してしまったなどと認めるわけにはいかなかった。

事実を否定し再び自害を試みるが、震える手はもはや包丁を持つことすらできなかった。

死の淵に立たされ生きること諦めなかったのは愛する者がいたからだ、そう思っていた。しかし、事実はどうだ。愛する者を失ってもなお自分は生きること執着している。こんな愛する者を殺しておいて死にたくないと思う者が『愛する者のため』などよく思えたものだ。

藤巻は卑しく生に執着する自分を強く嫌悪するが自殺する勇氣もなく、人を避け山奥に閉じこもり生きていくことを決めた。がそれも長くは続かなかず、血を求める強い衝動に抗えず一月もしない内にまた人を殺しその後も衝動に抗えず人を殺し続けた。

最初の内は殺すたびに罪の意識に苛まれ泣いていたが、次第に殺人に対する感情の揺れは小さく薄れ涙を流すことはなくなっていた。それは聖遺物を受け入れた者の当然の変化なのだが、藤巻はそれを知らず、早々に殺しに対し順応し他人の命を雑草でも刈り取るように断つ冷酷な自分こそが本質で、陽だまりの下人と触れ合うことを慈しむ自分など虚像でしかなかったのか、と自分自身が分からなくなっていた。

村人を皆殺しにして以来藤巻は人を殺し続けその数は100を越えようとしていた。しかし、日々続けられる空襲などで混乱していた中犯行は行われていた上、人間離れた身体能力を用いた逃走のため、警察や軍は犯人が誰かを特定することはおろか犯行の半分も把握できていなかった。

しかし、それでも彼女を追う者はいた。藤巻は自身を討とうとする者から逃れるため今まで旅をしてきたが、どこに行っても追手は藤巻を見つけ出しそのたびに彼女は命辛々逃げていた。

日本にいてはいつまでも逃れられない。そう思った彼女は外国への逃亡を選択したが、船で海外に渡ることは時勢的にも藤巻には不可能。彼女は自力で海を渡り逃れることを決意し、対馬ここまで来た。今の自分でも自力で逃れられるであろうここへ……

（あと少し……この海を渡れば……）

藤巻はゆつくりと瞼を上げ振り返り、もう二度と訪れることはないのであろう祖国の景色をその目に焼き付ける。

「……………」

しかし瞬間、藤巻の顔から憂いの色が消えた。

視線の先は木々が生い茂る山と小石が転がるのみ。誰がどう見てもどうということのない光景だが藤巻はこれに異常を感じとり敵の存在を察知した。

ただの農村の娘でしかなかった藤巻がなぜそのような鋭敏な神経を有しているのか。それは藤巻がこれまで送ってきた討伐者から逃れる日々が戦いを知らない彼女を鍛え上げたからだ。

討伐者の索敵能力、隠密能力はまさに本物が為す業といえた。藤巻が誰も立ち入らないような山奥に隠れようと見つけ出し、周囲へ注意を巡らせたとしても周りに溶け込み意識の隙をつき襲撃する。戦闘能力も高く藤巻はいつも討伐者の襲撃から必死になつて逃れていた。藤巻に聖遺物の加護がなければとうの昔に死んでいたことだろう。しかし、生き抜いたことにより藤巻は隠れること、見つけることにおいて彼らほどではないがその技を磨き上げることとなった。

藤巻は海を背に浜辺を囲む山に注意を向け臨戦態勢を取る。正面の山は勿論、左右の浜辺、背後の海に意識を張り巡らせる。

「
しかし、攻撃は彼女の注意を掻い潜り接近し、１メートル圏内にまで接近を許していた。

藤巻は左から迫る炎弾を避けるため勢いよく前方に跳び逃れる。

「
っ」

地面と接触した炎弾は爆ぜ、熱と衝撃が周囲３メートルにまで広がった。藤巻はあの一撃による死を逃れたものの爆発で碎け飛ばされた石と熱で背中を負傷し石が敷き詰められた地面を数メートル転がる。

「うっ……」

背中を焼かれあちこちを打ちつけ全身に痛みが走るが、藤巻はそれを無視してすぐさま横合いに転がり、振り下ろされた西洋剣を回避する。剣は全長１８０センチ強の長さを誇るフランスの両手剣『フランベルジュ』。それが数瞬前まで彼女の首があつた場所の石を碎き地面を抉っていた。

立ちあがり背中痛みで脂汗を一杯に浮かべた藤巻は目の前の男を見つめる。

長身だが細身で歳は３０ぐらいだろう男は鋭い眼光で藤巻を睨みつけると伸ばしっぱなしでぼさぼさになった髪をぐしゃぐしゃと掻き回した。

「まったく……こっちは楽に死なせてやるつもりだったのに。ちょこまかちょこまか全く面倒なのよな」

「はぁ……はぁ……」

藤巻を討とうとしている者は『魔術師』。

常識の外にいる彼らは同じく常識を離れた藤巻の存在を感知し討伐に乗り出した。

「はぁ……はぁ……はぁ……グッ」

藤巻は続く背後からの襲撃者に向け斬撃を放ち撃退するが、次々とわき出るように敵が現れ彼女に攻撃を仕掛け藤巻を包囲する。その数はこれまでの10や20程度ではなく、恐らくは50はいるだろう。藤巻は背中傷で動きが制限されながらも必死に回避し、全方位に展開できる斬撃で対応するが形勢は彼女の防戦一方だった。

「オラオラどうしたのよな女アツ！ 抵抗すんならきっちりしやがれ。それでもできなきゃさつさと死ねや！」

言うや男は藤巻に急接近しその長い西洋剣を振り下ろす。

藤巻はそれに斬撃を放ち軌道をずらすも男は気にせず蹴りを放ち藤巻の脇腹を蹴り飛ばした。藤巻は齒を食いしばり堪え男の首目がけて不可視の斬撃を放つ。

居合の如き速さで放たれた斬撃は男の首を捉え切り裂こうと迫る。しかし、男はフランベルジュを軌道上に構え見えないはずの斬撃を受け止め力任せに剣を振るって不可視の刃を打ち消した。

「なんだ……抵抗、できるじゃねえかよ。じゃあこっちもどんどんいかせてもらうぞ！」

男はその細身でありながら軽々と長剣を振りまわし藤巻に次々と剣撃を浴びせていく。藤巻は不可視の斬撃で軌道をずらし、怪我で動きが制限された身体を無理矢理動かし無様に避ける。隙を見て斬撃を放つもそれらはすべて避けられ、剣で弾かれ当たることはない。

討伐者は皆実力者揃いで藤巻をて手こずらせているのだが、この長剣の男は輪をかけて強く、不可視の斬撃を空を切り迫る音を頼りに捌けるのはこの男のみだ。

恐らくはこの集団のリーダーだろう長剣の男が戦闘に参加したのはつい一月前の一度きりで、男一人が加わっただけでそれまでの戦闘より困難なものへと変えた。その時の戦いでは初めて敵の数人を殺し連携の隙を生じさせ何とか重傷を負いながらも逃走することに成功したが、今回はそうもいかないようで襲撃者数名を殺したところで、すぐさま他の者がその穴を埋めるため陣形が崩れることはない。圧倒的な数が前回と同じ逃走を許さなかった。これほどの人員を投入した今日の討伐戦、恐らく彼らは今回で藤巻を討ち取り終わりにするつもりなのだろう。

これほどの陣形突破することは不可能に思えるが活路がないわけでもなかった。

リーダーであろう長剣の男はこの集団の指揮を取り、かつ戦闘においても要となる程の強さを誇っていた。もしこの男を退けることができれば連携に少なからず隙が生じるはずである。逃げるならその隙を突くほかない。

藤巻は背中への傷があと少し回復し次第長剣の男を討つことを決意する。

彼女は聖遺物を取り込んだことにより様々なものが常人の域を離れた。それは治癒力にも言え、彼女の背中への傷は既に出血も止まり今も徐々にではあるが普通ではありえない速度で回復を続けた。

あの男に挑めるほどに動けるにはもう少し、藤巻は攻撃を捌きつつ斬撃で牽制し時間を一杯一杯稼いでいる。

「クソッ……こっちはこんな殺し胸糞悪いだけなのによ。お前さんさっさと殺されてくれないか？ 今ならできるだけ楽に介錯してやる」

「お断りしますっ！」

そう討伐者である彼ら『魔術師』はこれまで藤巻について調査し、彼女と言葉を交わし、藤巻が自らその力を手にし好き好んで人を殺しているのではないのだと知っていた。ゆえに彼らも被害者ともいえる藤巻を殺すことを快く思っていない。しかし、無秩序に人々を殺し続ける藤巻を放置しては、終戦を迎えたこの国の民に安息は訪れることはない。彼らも魔術師に運命を弄ばれた彼女を救いたかったがもはや後戻りはできないと判断し、殺すことでこの修羅道から藤巻を救うという手段に出た。

「そつかい……だが、こつちも引けんのよ。俺達はお前を殺す。こつちも命賭ける覚悟ができているってなあっ！」

言うや男は長剣を横薙ぎに振るう。

藤巻は左腕の周辺に斬撃の刃を配置し剣を受けて凌ぐが、勢いに押され体勢を崩してしまふ。更に不可視の刃で守ったはずの腕は浅いながらも斬られていた。

敵はその隙を逃すまいと囲んでいた3人が一斉に跳びかかる。だが藤巻の斬撃に放つために体勢は関係なく、倒れながらも跳びかかって来た3人へと斬撃を放つ。3人は斬撃により五体をばらばらにされたが最後の足掻きとばかりに持っていた短刀を投擲して逝った。短刀は藤巻の足と腹を掠める程度の傷しか与えなかったが、彼らがこの戦いにかける覚悟のほどを雄弁に語っていた。

藤巻は体勢を立て直し更なる追撃に備える。

傷の痛みも弱まってきた。これなら後数分もしない内に攻撃に移れる。

しかし、本当に勝てるのか？ 状態が万全じゃない、敵の数が多すぎる、などの問題ではなく彼らを打ち負かすほどの意志、この戦いに賭ける覚悟の問題だ。

日本という国のため、平和を求める民のため、散って逝った仲間のため戦う彼らに対し自分はどうか？ 何か為すべきものがある、守りたいものがある、譲れないものがある、そんな立派な理由は持ち合わせず死にたくないという利己的な理由でのみ他者を殺して生き延びる。こんなちっぽけで情性に生きる自分がこれほどの覚悟を持つ者達を打ち負かせるのか？

（駄目だ考えるな。今はただ目の前のことに集中して！）

四方八方からの攻撃を捌く藤巻の動きは着実に良くなってきた。敵もこのことに気づいており早々に止めを叩きこもうと攻撃をより激しくさせる。

「……………」

藤巻は息つく暇を与えぬ猛攻で傷を負いながらも動きを鈍らせる重傷は何とか避け続ける。それはめちゃくちゃな体捌きでとても無様な姿だったが、彼女の神経を限界まで擦り減らせた必死の回避行動だった。

「シッ！」

「！？」

長剣の男は藤巻に銀色に光る何かを投げる。それは何の変哲もないナイフなのだが、まるでそれが合図であるかのように周りの敵も一斉にナイフを投擲した。300を超えるナイフが隙間なく全方位から藤巻に迫る。彼女は一瞬思考が停止するが瞬時に再起動させ取るべき行動を選択する。

撃ち落とす。

持てる力を全て出して迎え撃つ。

藤巻は不可視の刃を自身の出せる最大速度で振るい迫るナイフを次々と撃ち落としてゆく。一瞬も緩むことのない真正銘の全力だ。1本2本、10、30、80。ナイフは次々音を立て地面に落下しその数を減らしていくが、敵も次々とナイフを投げ終わりが見えない。このたった数秒の出来事が彼女には何時間も長い間の出来事のように感じていた。

敵ももう投げる得物がなくなったのか弾幕も次第に薄くなり終わりが見え始めた。しかし、終わりが見え始めたことにより藤巻の緊張も僅かながら緩みだしていた。ゆえに彼女はその接近に気づくのが遅れてしまった。

長剣を携えた男は人間と思えない速度で疾駆し藤巻に接近しフランベルジュを振りぬこうとしていた。

今からでは避けきれない。かといって、この男は力技で斬撃を打ち消してしまうので斬撃で軌道を逸らせるか怪しい。

（だったら……）

藤巻は男に肉薄する。

まだ傷は痛むが今出せる全力でこの男を突破する。

両者は駆け抜け迫りその距離を刻一刻と縮めていく。

男は剣を振りぬいた。刀身は疾走し迫る藤巻の顔を捉え両断せんと居合のような速さで彼女に迫る。

対して藤巻はまだ刀を放っていない。男は斬撃を受け止め力技で打ち消して見せた。ならばこの攻撃も今まで以上のものでなければならぬ。打ち消せない刃を作り出せ。自分の中にある刀を十二分に再現した刃を作りだせ。

男の剣が眼前に迫った瞬間、藤巻は刃を打ち出した。

不可視の刃とフランベルジュが甲高い金属音を立て激突し火花を

散らす。

男はその細身からは想像できない力を剣に込める。しかし、刃は打ち消されることなく拮抗し互いに激しくせり合っている。

男は予想外の展開に目を丸め一瞬動きを止めるが、刃を放った藤巻は男の剣を下から叩き上げた。剣は藤巻の頭上を通過し彼女は男の懐へと潜り込み刃を放つ。

「ぐう……っ」

（……やった！）

斬撃は男の右肩を切断し肩口からは大量の血が噴き出した。

あの一瞬で身を捻り胴への直撃を避けたのは流石といえたが男は戦力を大きく削られた。

リーダーである男がやられたことで敵は少なからず動揺しているこの瞬間を逃すわけにはいかない。藤巻は男の横を駆け抜け戦線からの離脱を図る。

「まったく……やってくれたのよな。あとはあの方に任せるとするか」

男は小さく呟くが藤巻にはそれが聞こえることはなかった。

敵は動き出したが元々男がカバーしていた場所は手薄で5、6人程度しか配置されておらず攻撃が間にあった敵は3人だけだった。それほど男の強さは仲間から信頼されていたのだろう。

藤巻は3人を撃破し陣形の外に出る。抜け出してもなお彼女は疾走し討伐者達から距離を離してゆく。

（あとは……ここから離れた場所から海を泳いで外国に行けば……

…やっと…やっと…

浜辺を離れ山へと入ろうと跳躍する。

木々が生い茂る山を駆け抜ける藤巻は前方に一瞬光輝く何かを見つけそれが何なのかと訝しむが、足は止めることなく山の中を疾走する。藤巻は何とくあの光る何かが気がかりで接近しながらもギリギリまで観察した。

「……糸？」

木々の隙間からさす光を受け輝いていたのは極細の糸。それがまるで藤巻の行く手を塞ぐように張られていた。

（……まさか！？）

藤巻は疾走していた足を止め地面を抉り急停止を試みる。

（……間にあわない……）

藤巻は咄嗟に刃を出し接触部位をガードする。

地面をすべる藤巻はそのまま糸に接触するが糸は切れることなく藤巻の行く手を塞ぎ続ける。

（っ……そんな、糸で……）

藤巻の身体は停止したが、糸は僅かに藤巻の肌に触れ彼女の肌を切ってた。

「良く止まりましたね。あのまま駆け抜けていれば貴女の五体はばらばらになっていたでしょうに」

突然響いた声は感情の色を一切排した声で、男のものとは思えないほど高く、刀のように冷たく鋭い声だ。

「その糸は『七閃』。私には過ぎた代物です」

振り返った先にいたのは純白の着物を纏った長髪の男。手には2メートルの刀を持ち、腰の辺りまで長くすつと真つすぐ伸びた黒髪を首の後ろで一房に纏めている。歳の頃は20の前半だろうが端正な顔はどこまでも無表情でまるで人形のような美しさだ。

「ここにいると言うことは建宮を倒したのですね」

「たて……みや……」

「長い剣を振るう無精なりの男です」

「……生きていますよ。ただ怪我は負っていますが」

「そうですか。建宮は私がこの糸を張り終えるまでの間良く戦ってくれましたのですね」

男の無表情にどこか安堵の色が見えた気がしたが、すぐさまその色は見えなくなり何も感じさせない無表情へと変わる。

「この糸は貴方を逃さないために張ったものであの浜辺を囲むように配しました。貴方はここから逃れることはできません」

言うや男は藤巻に歩み寄りそれに合わせ背後の木々から6人の男女が現れ、藤巻は糸から離れ臨戦態勢を取る。

「申し遅れました。私は天草式十字凄教教皇、かんざきかつき神裂火月と申します」

神裂は左手に携えた刀に右手を添え、周りの男女も得物を手にす

る。

「貴方はここで終わりです。この国の民をこれ以上殺させはしません」

神裂は銀に輝く刀身をゆつくりと鞘から抜き語り続ける。

「しかし、魔術師の手により運命を歪められた貴方も私達は救いましょう。彷徨い続ける修羅道より貴方を救い出しましょう」

抜刀した刃の切先を藤巻に向け静かに宣言する。

「それが私の使命

救われぬ者に救いの手を」

13話 神裂（後書き）

次話からは法の書編です。

11月8日、本編の一部を修正しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1110w/>

とある不幸の第二人生

2011年11月11日18時11分発行